

# 史跡賀茂御祖神社境内

2011 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所







# 史跡賀茂御祖神社境内

2011 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、防災施設事業に伴う史跡賀茂御祖神社境内の発掘・立会調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

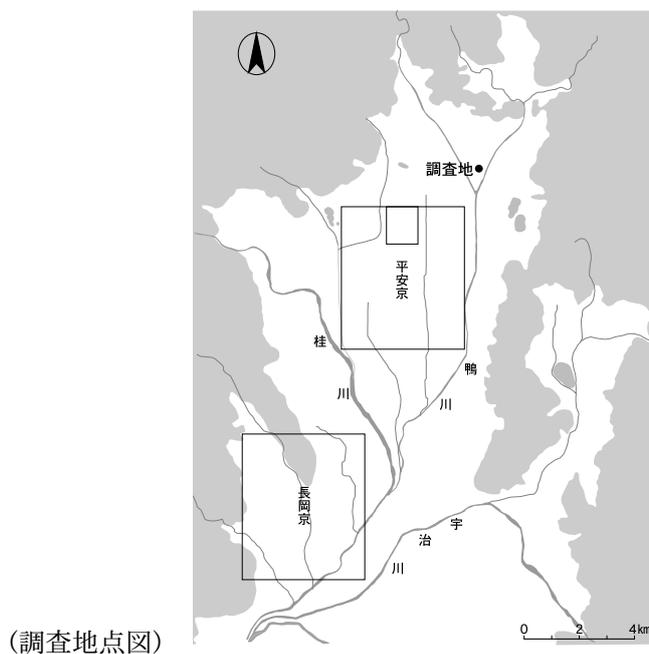
平成 23 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 史跡賀茂御祖神社境内
- 2 調査所在地 京都市左京区下鴨泉川町地内
- 3 委 託 者 宗教法人 賀茂御祖神社 代表役員 新木直人
- 4 調査期間 2008年12月1日～2010年6月30日
- 5 調査面積 42.2 m<sup>2</sup> 立会延長 1,760m
- 6 調査担当者 小松武彦・津々池惣一・田中利津子・近藤章子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「植物園」・「相国寺」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類別に通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 小松武彦・田中利津子
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



# 目 次

1. 調査経過	1
2. 歴史・位置	4
3. 遺 構	5
(1) 層序	5
(2) 遺構	6
4. 遺 物	19
(1) 土器類	19
(2) 瓦類	23
(3) 金属製品	25
5. ま と め	25

# 図 版 目 次

図版 1	遺構	1	1 区第 2 面全景 (西から)
		2	2 区第 2 面全景 (北西から)
図版 2	遺構	1	3 区築地 15 (南西から)
		2	5 区第 2 面全景 (西から)
図版 3	遺構	1	6 区第 2 面全景 (東から)
		2	6 区集石 19 (南西から)
図版 4	遺構	1	2 区西壁断面 (東から)
		2	5 区東壁断面 (西から)
		3	5 区南壁断面 (北から)
		4	6 区東壁断面 (西から)
		5	No. 10 地点土坑検出状況 (南から)
		6	No. 32 地点路面検出状況 (東から)
		7	No. 73 地点ピット検出状況 (南から)
		8	No. 77 地点ピット検出状況 (東から)
図版 5	遺構	1	No. 78 地点ピット検出状況 (北から)

- 2 No. 80 地点土坑検出状況（南東から）
- 3 No. 84 地点石列検出状況（北東から）
- 4 No. 84 地点石列下部検出状況（東から）
- 5 No. 104 地点土坑検出状況（東から）
- 6 No. 114 地点礎石検出状況（南から）
- 7 No. 139 地点土器出土状況（東から）
- 8 No. 155 地点礎石検出状況（南から）

図版6 遺物 土器類

図版7 遺物 土器類・金具

図版8 遺物 軒瓦

## 挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	1区調査前全景（北西から）	2
図3	2区調査風景（北から）	2
図4	調査地点位置図（1：1,000）	3
図5	1区遺構実測図（1：60）	6
図6	2区遺構実測図（1：60）	7
図7	3区遺構実測図（1：60）、築地15立面図（1：40）	8
図8	4区遺構実測図（1：60）	9
図9	5区遺構実測図（1：60）	10
図10	6区遺構実測図（1：60）	11
図11	No. 78 地点立会調査風景（西から）	11
図12	No. 10 地点遺構実測図（1：40）	11
図13	No. 73・77 地点断面図（1：20）	12
図14	No. 78 地点遺構実測図（1：40）	12
図15	No. 79・80 地点断面図（1：20）	13
図16	No. 83・85 地点断面図（1：20）	13
図17	No. 84 地点石列実測図（1：60）	14
図18	No. 91・93～95・97・99・104 地点断面図（1：20）	15
図19	No. 106・111～113・135・139・140 地点断面図、No. 114 地点遺構実測図（1：20）	…

図 20	No. 155 地点遺構実測図、No. 166 ~ 170・176 地点断面図 (1 : 20)	.....
------	--	-------

17

図 21	土器実測図 1 (1 : 4)	.....	20
図 22	土器実測図 2 (1 : 4)	.....	21
図 23	土器実測図 3 (1 : 4)	.....	22
図 24	土器実測図 4 (1 : 4)	.....	23
図 25	軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)	.....	24
図 26	金具実測図 (1 : 3)	.....	25
図 27	立会調査遺構検出地点位置図 (1 : 1,000)	.....	26
図 28	「下賀茂社堂舎絵図」本殿部分	.....	31
図 29	「下賀茂社堂舎絵図」大炊殿部分	.....	31
図 30	「賀茂御祖神社素絵図」	.....	31
図 31	「御祖社図」	.....	32
図 32	「孝明天皇行幸境内舗設図」	.....	32
図 33	「鴨社古図」	.....	32
図 34	「御蔭祭大宮河合社御蔭社献備神饌図」	.....	32

## 表 目 次

表 1	遺構概要表	.....	5
表 2	遺物概要表	.....	19
表 3	立会調査主要遺構検出地点一覧表	.....	27



# 史跡賀茂御祖神社境内

## 1. 調査経過

今回の調査は、国宝賀茂御祖神社東西本殿他三十一棟防災施設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査および立会調査である。防災施設工事は平成20年から平成22年までの3箇年にわたり施工が予定されていた。

賀茂御祖神社境内は1983年に国の史跡に指定され、さらに1994年には世界遺産に登録された。そのため、京都府教育庁文化財保護課および京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の指導のもと、工事施工に伴い調査を実施することとなった。

平成20年度の発掘調査は、東本殿の北側に1区、西本殿の西側に2区、大炊所北東側に3区、本殿築地北西側の外側に4区を設定し、12月1日から12月26日まで実施した。1区は、第1面にて調査区西寄りで円形の石を1石検出した。この石は権地（遷宮時の仮社殿）の据付け石のものと考えられた。そのため、文化財保護課の指導を受け、調査区の西側2mに1m×1mの調

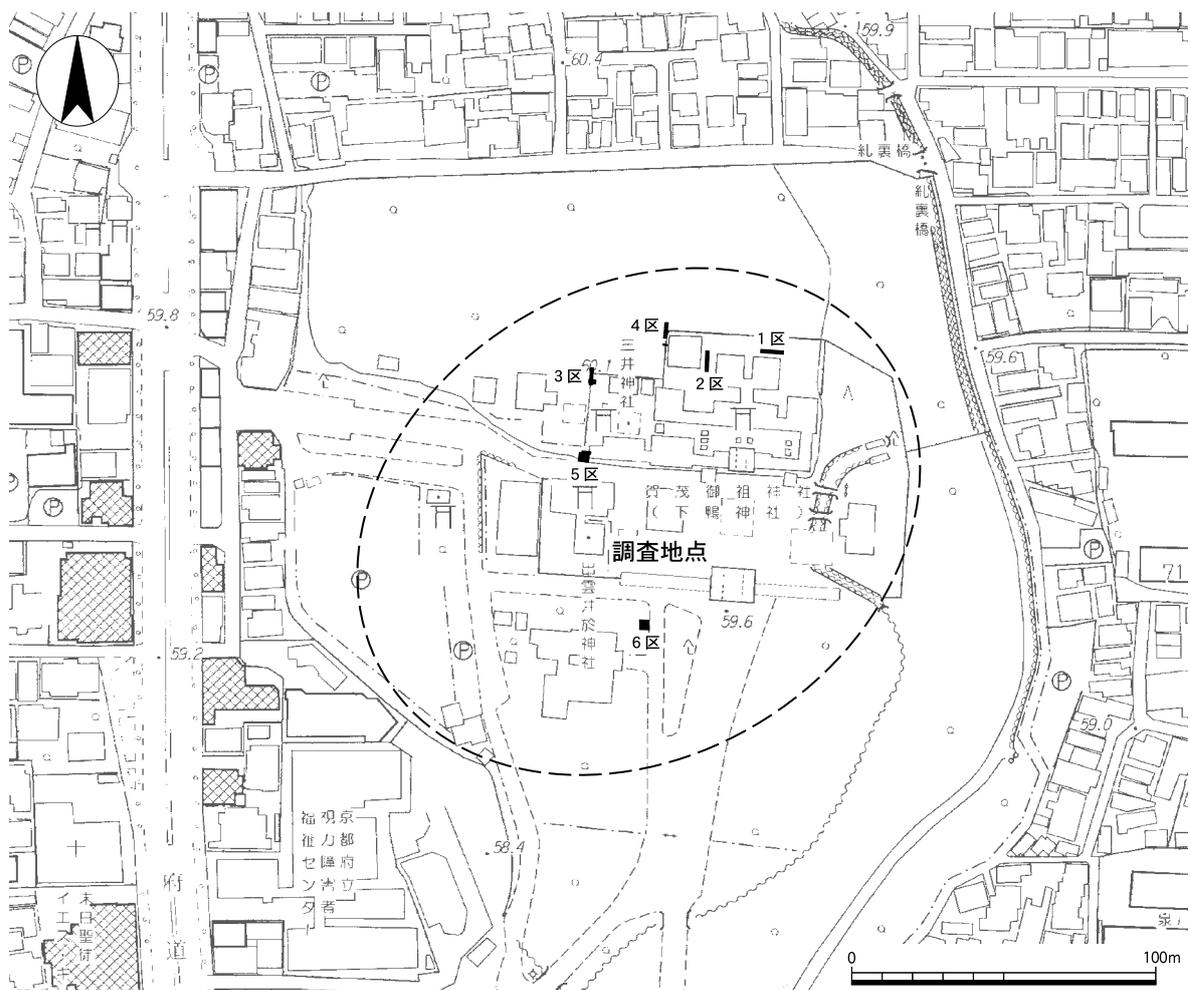


図1 調査位置図 (1 : 2,500)



図2 1区調査前全景（北西から）



図3 2区調査風景（北から）

査区を新たに設けて調査を行ったが、対になる据付け石は検出できなかった。第2面では落込み13を検出した。調査での掘削深度は工事の掘削深度内にとどめるとの指導があり、そのため、下層遺構と地山の確認を断割り調査で行った。2区は、第1面でピット、土坑を検出した。第2面では南北方向に並ぶピット3基などを検出した。延長を確認するため、文化財保護課の指導を受け、北側へ拡張を行った。その結果、新たにピットを1基検出した。3区は、調査区南側で東西方向の石列を2列検出した。この石列が「下賀茂社堂舎絵図」にある三井神社の南北築地から大炊所の北へ東西に延びる築地に該当すると考えられた。そのため、文化財保護課の指導を受け、東と西へ調査区の拡張を行った。その結果、西側は木根痕で攪乱を受けていたが、東側では石列の延長を検出することができた。4区は、既埋設管と木根痕などの攪乱が著しく、鎌倉時代から室町時代の土坑1基を検出したのみである。調査後、文化財保護課の指示で、検出遺構・遺構面は砂と土嚢で養生し埋戻しを行った。

平成21年度の発掘調査は、三井神社と大炊所の境の南側参道に5区、楼門西廻廊門南側の花壇と参道に6区を設定し、5区は4月6日～4月17日、6区は6月22日～7月9日に実施した。5区は、既存埋設管などの攪乱が著しく、遺構の残存面積が少なかった。しかし、江戸時代後期から明治以降の西門跡の礎石や平安時代中期の溝などを検出した。6区は、江戸時代後期の読経所あるいは社務所に関連する南北方向の柵や、平安時代後期から鎌倉時代の集石遺構を検出した。集石遺構については文化財保護課の指示で、保存処置として砂と土嚢で養生を行い埋め戻した。

立会調査は、下鴨神社の行事や工事の進捗に沿って実施した。平成20・21年度は、本殿築地の外側、大炊所、参集殿西の道路側、楼門南側、三井社中門南から中門・東御料屋外側の90箇所を平成21年2月26日から平成22年3月31日まで断続的に実施した。調査で江戸時代の土坑・礎石・ピット・路面、平安時代の整地層・包含層、時期は明らかではないが石列、土坑・ピット・落込みなどを検出した。

平成22年度立会調査は、東御料屋東側、三井社北塀外側、三井社内、本殿内、大炊所内、参集殿西の駐車場側、楼門南の東西の98箇所を4月5日から6月30日まで実施した。調査では、寛永五年（1628）再建時の化粧砂や室町時代（15世紀代）の土師器の細片が詰まった整地層、平安時代中期後半の土器を多く含む整地層、古墳時代の落込みなどを検出した。

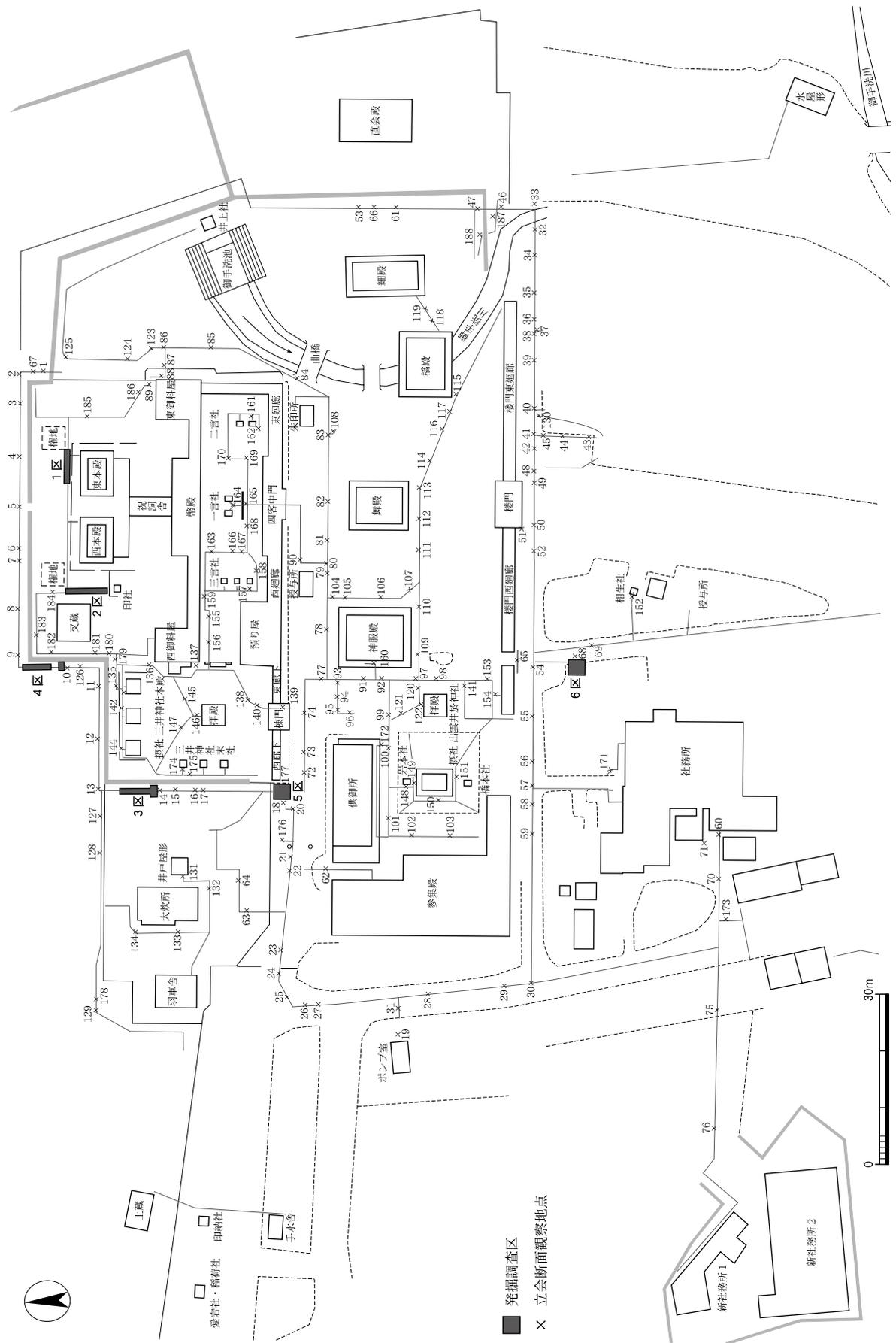


図4 調査地点位置図 (1 : 1,000)

## 2. 歴史・位置

賀茂御祖神社が歴史に登場するのは「続日本後紀」においてであり、天平勝宝二年（750）に賀茂御祖神社に御戸代田1町を奉られた記事がある。賀茂縣主が禰宜を勤める賀茂別雷神社の摂社の一つと言われている。天平神護元年（765）以前に、三井社の神職の白髪部氏に「鴨禰宜白髪部」の氏姓が与えられ、上賀茂神社からの独立が朝廷によって認められる。宝龜十一年（780）には、祠官である鴨禰宜真髪部（白髪部氏）に賀茂縣主の賜姓が行われた。翌年には禰宜・祝に把笏が許され、上・下社は対等となる。延暦三年（784）には従二位の神階を授かり、延暦十三年（794）には正二位勳一等に叙せられた。

平安京遷都（794）によって賀茂神社は王城鎮護の神として祀られる。大同元年（806）には賀茂祭が勅祭となり、弘仁元年（810）に初めて斎王が置かれる。初代斎王は嵯峨天皇の皇女有智子内親王が、以後400年間の間に35人の斎王が卜定され、承久三年（1221）に終わる。

賀茂の斎院御所は元永二年（1119）に焼失する。

応仁元年（1467）から文明九年（1477）の応仁の乱により、社殿および紵の森も戦禍で荒廃し、社殿が復興するのが寛永五年（1628）・寛永六年（1629）の造営・式遷宮の際に再建される。これ以降、延宝七年（1679）、正徳元年（1711）、寛保元年（1741）、安永六年（1777）、享和元年（1801）、天保六年（1835）、文久三年（1863）の式遷宮が行われ、現在の社殿の姿に至る。

また、賀茂祭も元禄七年（1694）に再興される。

位置は平安京の北東で賀茂川と高野川の合流する三角洲にあり、境内は標高60.5～56.0mの北西から南東方向に傾する。境内の広さは紵の森を含めた南北620m、東西最大幅240m、最小幅150mの約12万平方メートルである。主要社頭は、周辺より一段高く平坦地に建てられ、東は奈良の小川と西は瀬見の小川（現在は流れていない）に囲まれた所に立地している。

### 3. 遺 構

#### (1) 層序

1区(図5)の基本層序は、表層部には5～20cm大の石が敷き詰められる。地表下0.15mまでは暗褐色粗砂(現本殿の盛土)、～0.35mまではにぶい黄褐色泥砂層・瓦含む、～0.5mまでは灰黄褐色砂泥層・土師器含む(第1面)、～0.65mまではにぶい黄褐色砂泥層・灰黄褐色砂泥層(第2面)、～0.85mまではにぶい黄褐色砂泥・褐色砂泥・灰黄褐色砂泥の礫混層、以下、褐色砂礫・褐色砂泥層の無遺物層となる。

2区(図6、図版4-1)の基本層序は、表層部には5～20cm大の石が敷き詰められる。地表下0.1mまでは暗褐色粗砂層(本殿の盛土)、～0.2mまでは褐色泥砂層、～0.3mまでは灰黄褐色砂泥・にぶい黄褐色泥砂層(第1面)、～0.4mまでは灰黄褐色砂泥層(第2面)、～0.55mまではにぶい黄褐色砂泥・黒褐色砂泥層、以下、褐色砂礫・灰黄褐色砂礫層(無遺物層)となる。

3区(図7)の基本層序は、地表下0.6mまでは近現代層である。その下は、近世の堆積土層である。一部断割り調査で地表下1.0mにおいてにぶい黄褐色砂泥の無遺物(地山)を検出した。

4区(図8)の基本層序は、防災・防犯管の施設が4本敷設され、地表下0.3mまでは近現代層、0.5mまでは江戸時代の包含層で、0.5～1.0mに調査区の広い範囲を占める土坑があり、その下層0.6mまでにぶい黄褐色砂泥の無遺物層(地山)となる。

5区(図9、図版4-2・4-3)の基本層序は、地表下0.05mまでが現参道整地層の明黄褐色粗砂、～0.2mまで黄褐色粗砂、～0.4mまでオリーブ褐色粗砂で、この上記2層は出土遺物から江戸時代以降の参道にあたる。東壁断面の観察では、参道面は北から南へ向かって厚く盛られ、断面形がカマボコ状を呈する。また、参道の北端部分は北へ緩やかに落ち込み、溝状を呈しており、参道の側溝と考えられる。～0.45mまでは暗灰黄色砂泥炭混で平安時代以降の整地層である。以下は黄褐色砂泥の無遺物層である。

6区(図10、図版4-4)の基本層序は、地表下0.1mまでが現参道整地層の褐色粗砂、～0.4mまでは4層にわたる旧参道整地層が堆積する。～0.5mまでが褐色砂泥で鎌倉時代から平安時代後期の整地層で西から東へ落ち込み状となる。以下褐色泥砂の無遺物層である。

表1 遺構概要表

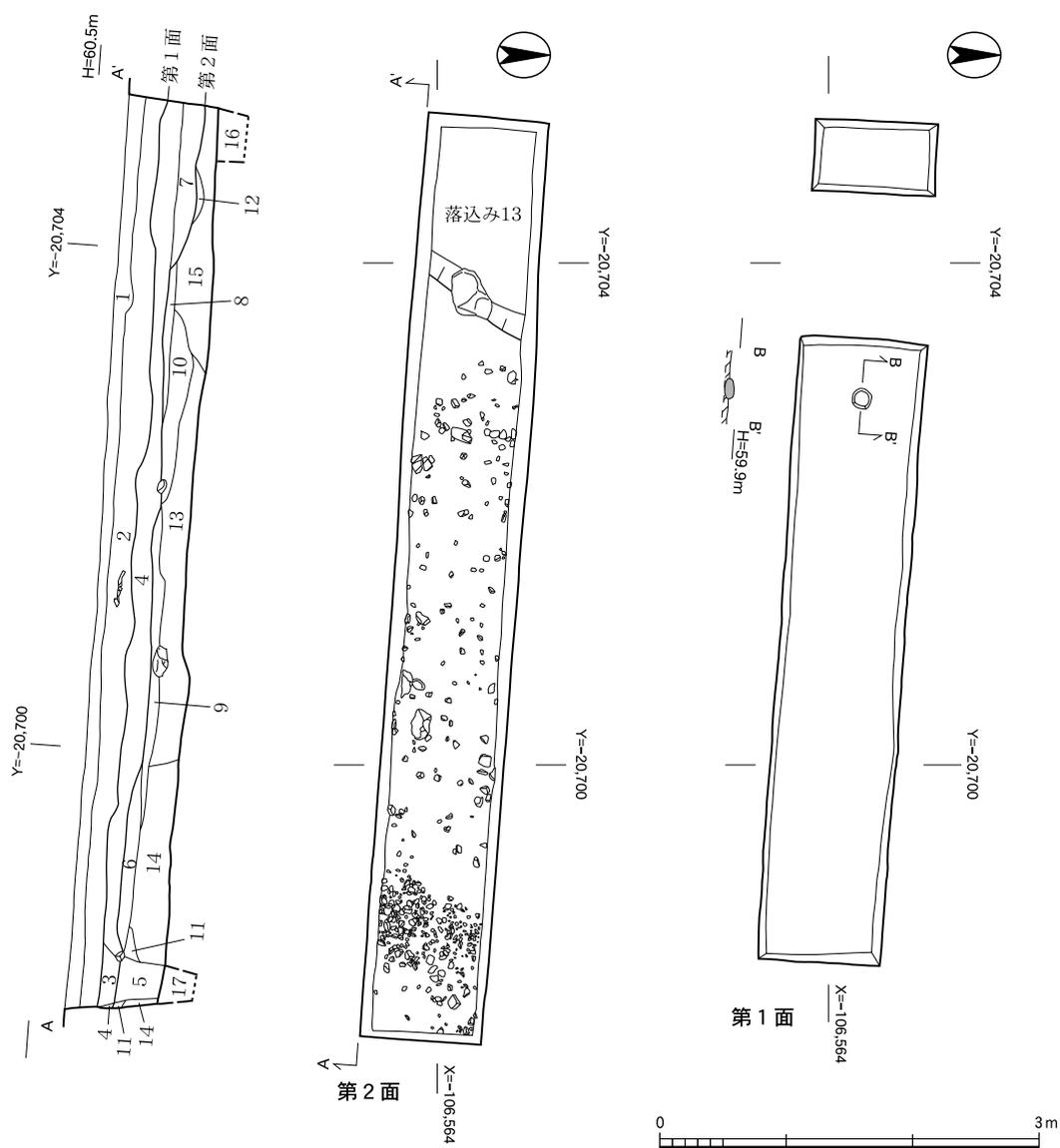
時 代	遺 構
古墳時代	落込み
平安時代	溝、集石遺構、整地層
鎌倉時代～室町時代	包含層
江戸時代	土坑、ピット、礎石、柵、築地、路面、石列、落込み

## (2) 遺構

### 1区 (図5、図版1-1)

第1面(地表下0.3m)では、調査区西側で0.15m大の円形の石を1石検出した。この石は権地(遷宮時の仮社殿)の据付け石のものと考えられる。

第2面(地表下0.4m)では、調査区西端で西へ下る落込み13を検出した。この落込み13の肩口で0.3m×0.4m大の石を検出した。埋土には多量の瓦が含まれていた。



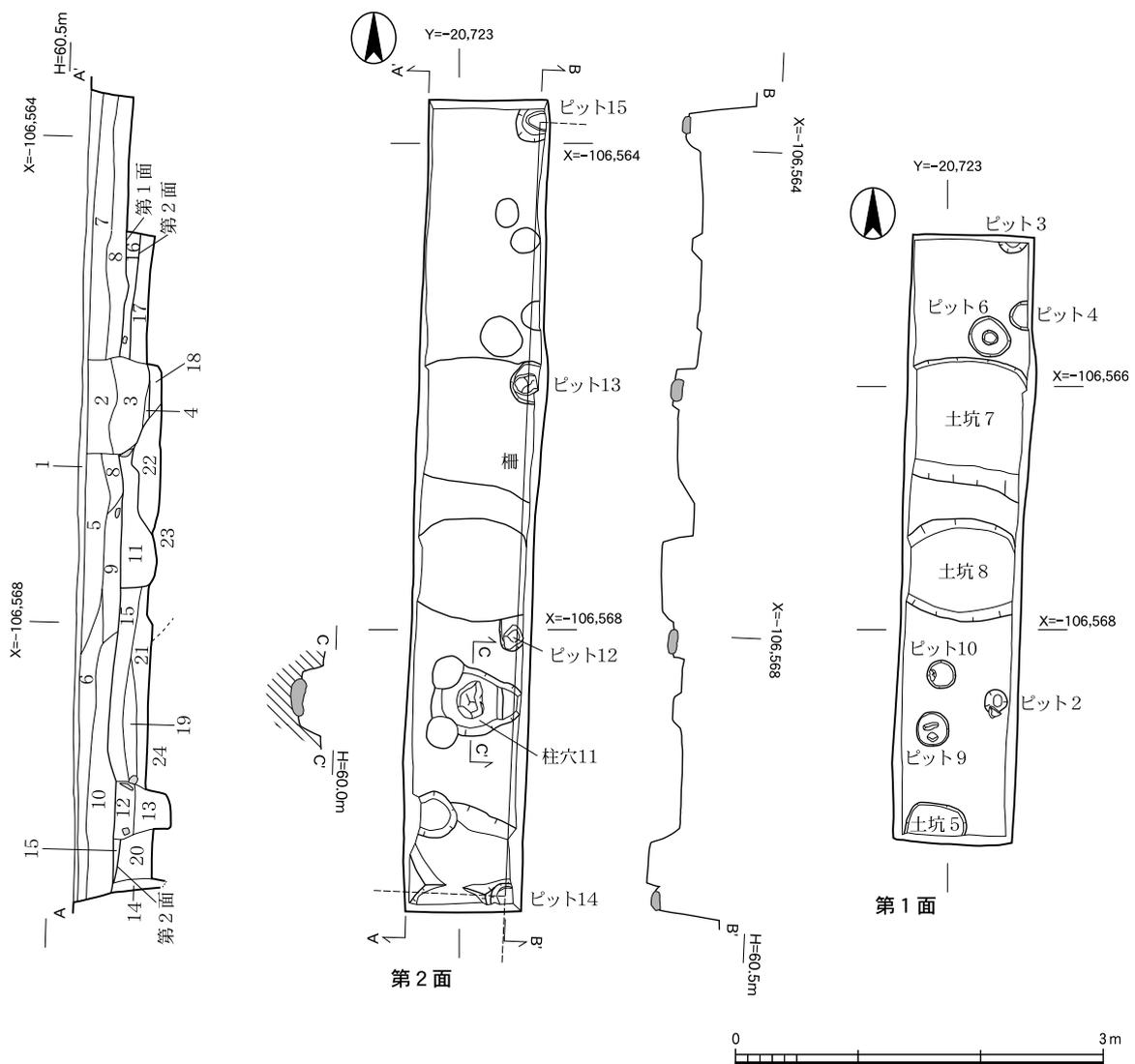
- |                             |                         |                         |
|-----------------------------|-------------------------|-------------------------|
| 1 10YR3/3暗褐色粗砂 (現整地層)       | 6 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂       | 12 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂        |
| 2 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂、瓦多量・土師器含む | 7 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 (落込み13) | 13 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、礫混じり |
| 3 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂           | 8 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥       | 14 10YR4/4褐色砂泥、礫混じり     |
| 4 10YR4/2灰黄褐色砂泥、土師器含む       | 9 10YR4/2灰黄褐色砂泥         | 15 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫混じり   |
| 5 10YR4/4褐色砂泥               | 10 10YR3/2黒褐色砂泥、炭混じり    | 16 10YR4/4褐色砂礫 (無遺物層)   |
|                             | 11 10YR4/2灰黄褐色粗砂        | 17 10YR4/4褐色砂泥 (無遺物層)   |

図5 1区遺構実測図 (1:60)

2区 (図6、図版1-2)

第1面 (地表下0.25 m) では、ピット6基 (ピット2～4・6・9・10)、土坑3基 (土坑5・7・8) を検出した。ピットは径0.2～0.35mで建物などに関連するものではない。土坑は木根の抜取痕と考えられる。

第2面 (地表下0.45 m) では、南北方向の柵 (ピット12～15)、柱穴1基 (柱穴11) を検出した。柵は調査区東壁沿いに検出した。ピットは、いずれも径0.4mの掘形で、約0.2mの根石が据えられる。検出長は6.4m、柱間2.1m等間の3間である。柱穴11は、調査区南寄りで見出された。掘形は径0.55～0.6m、深さ0.25mである。約0.3m大の根石が据えられる。



- |   |                       |    |                        |    |                      |
|---|-----------------------|----|------------------------|----|----------------------|
| 1 | 10YR3/3暗褐色粗砂 (現整地層)   | 9  | 10YR4/3～5/3にぶい黄褐色泥砂    | 17 | 10YR3/2黒褐色砂泥         |
| 2 | 10YR4/4褐色泥砂           | 10 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、瓦多量含む  | 18 | 10YR3/4暗褐色砂泥、土師器含む   |
| 3 | 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂、小礫混じり | 11 | 10YR4/2灰黄褐色泥砂、土師器少量含む  | 19 | 10YR5/2灰黄褐色砂泥        |
| 4 | 10YR3/2黒褐色砂泥、焼土含む     | 12 | 10YR4/3～5/3にぶい黄褐色砂泥    | 20 | 10YR4/2灰黄褐色砂泥        |
| 5 | 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂       | 13 | 10YR4/2灰黄褐色砂泥、小礫混じり    | 21 | 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫混じり   |
| 6 | 10YR4/3～5/3にぶい黄褐色泥砂   | 14 | 10YR4/3～5/3にぶい黄褐色砂泥    | 22 | 10YR3/2黒褐色砂泥         |
| 7 | 10YR4/4褐色泥砂、土師器少量含む   | 15 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥        | 23 | 10YR4/4褐色砂泥 (無遺物層)   |
| 8 | 10YR4/2灰黄褐色砂泥、瓦多量含む   | 16 | 10YR4/2～5/2灰黄褐色砂泥、小礫含む | 24 | 10YR4/2灰黄褐色砂礫 (無遺物層) |

図6 2区遺構実測図 (1:60)

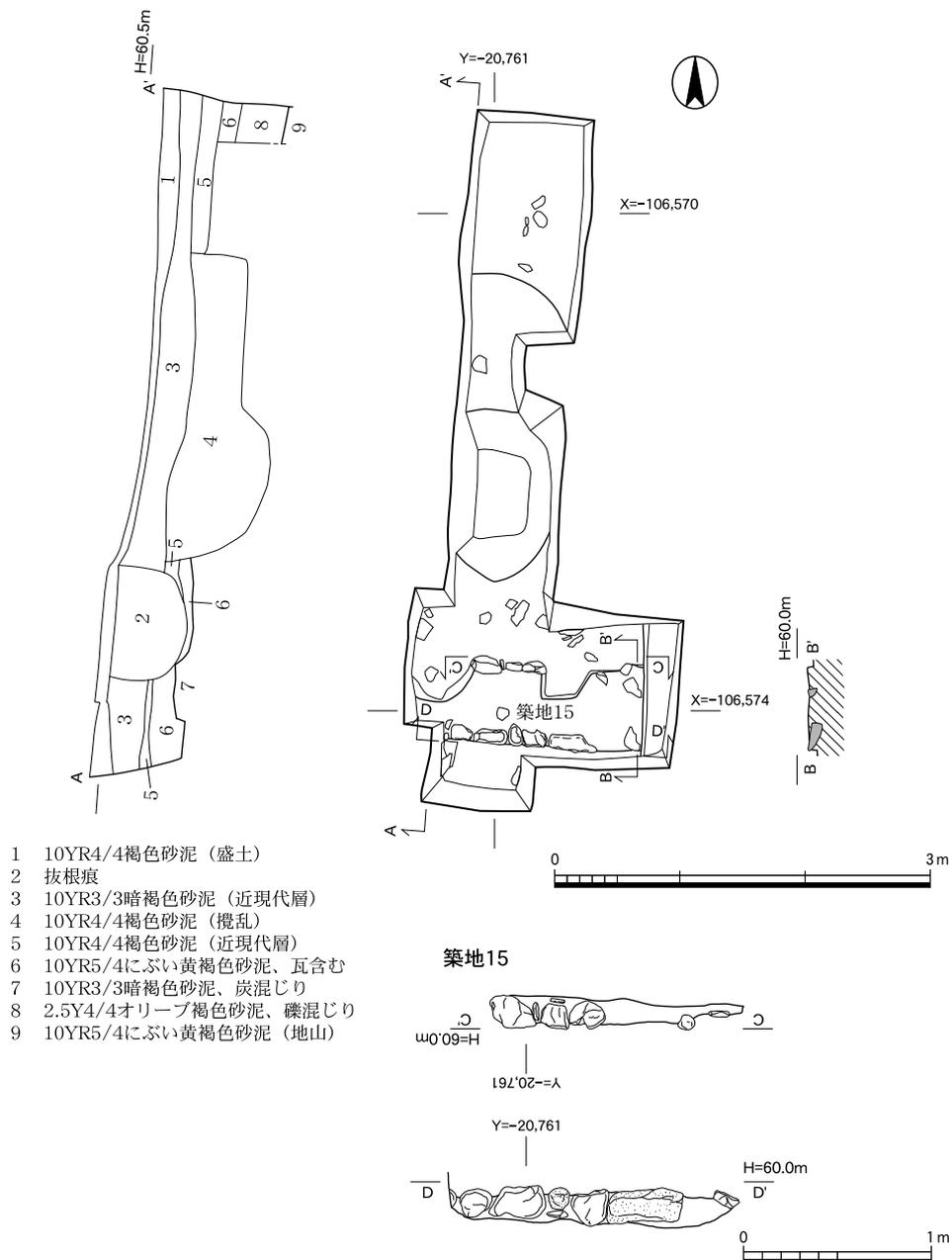


図7 3区遺構実測図（1：60）、築地15立面図（1：40）

### 3区（図7、図版2-1）

調査区南部で地表下0.6mにおいて、北・南側に面を持つ築地の基底部（築地15）を検出した。検出規模は南北0.65m、東西1.85m以上で、高さ0.2mである。石は長軸が0.1～0.4m大のものを外側に面をそろえて据えられる。石材はチャートが主で花崗岩も2石ある。両外側にはわずかな窪みがあり、瓦が散乱している状態である。出土遺物から江戸時代の遺構と考えられる。

### 4区（図8）

地表下0.6mで土坑16を検出した。南北4m以上、東西1m以上である。出土遺物から鎌倉時代から室町時代と考えられる。

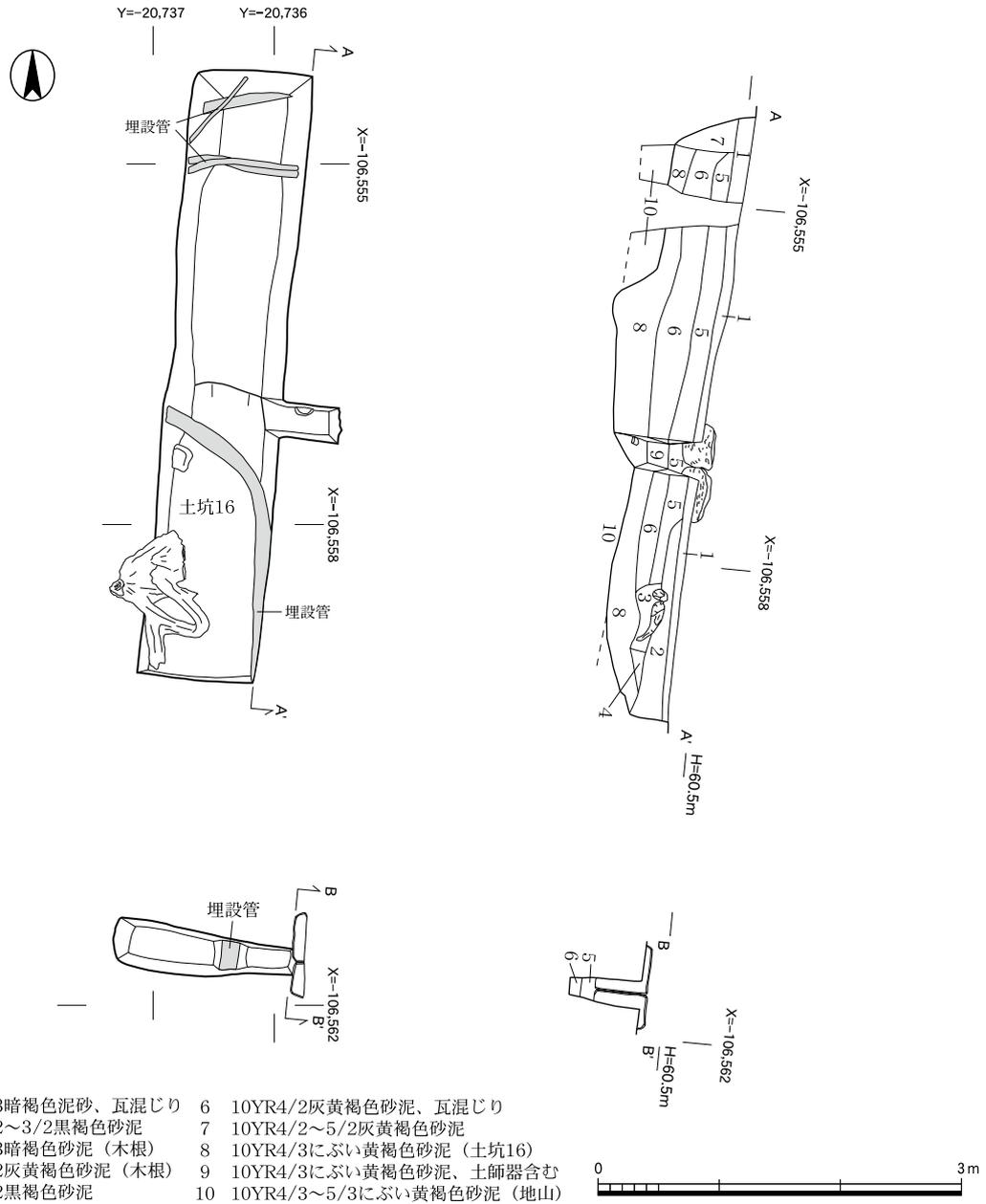
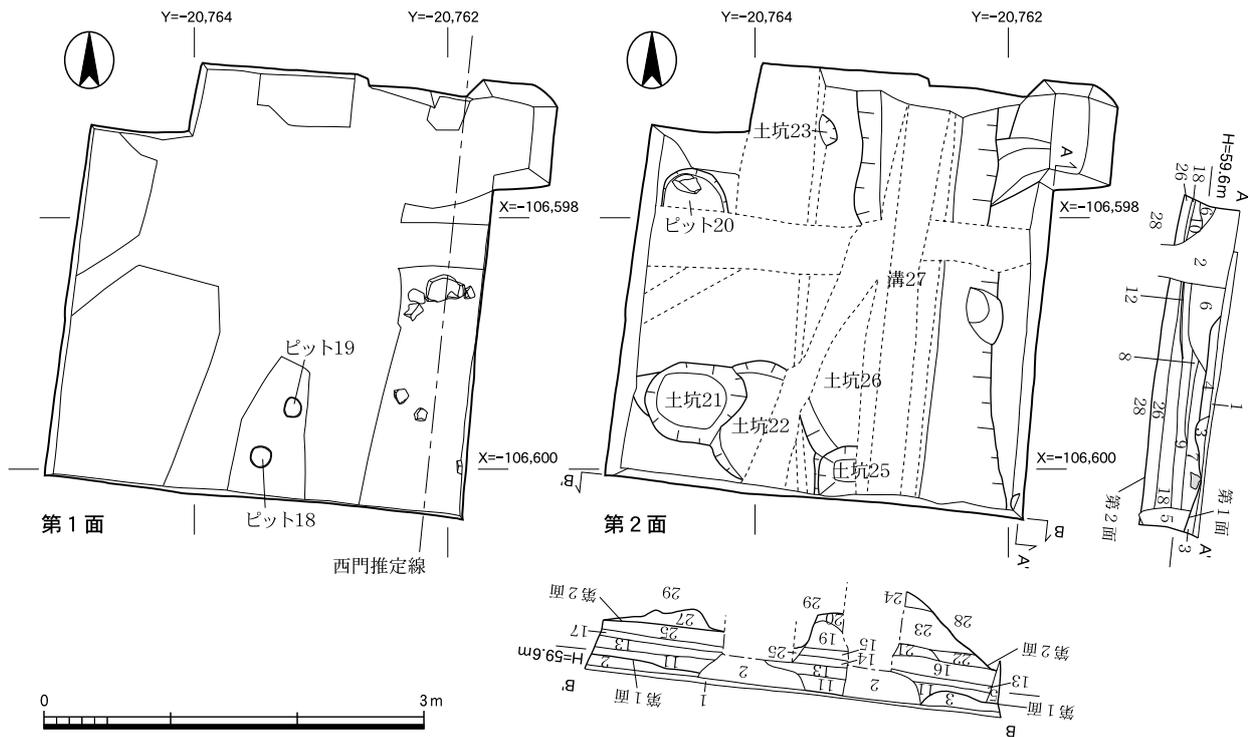


図8 4区遺構実測図 (1:60)

5区 (図9、図版2-2)

調査区の大半が埋設管などで攪乱されていたが、第1面 (地表下約0.05m、黄褐色粗砂上面) では、0.3m×0.2m大の花崗岩1石、中央部南側で径0.1mのピット2基 (ピット18・19) を検出した。

第2面 (地表下0.45m、黄褐色砂泥上面) では、ピット1基 (ピット20)、土坑5基 (土坑21~23・25・26)、南北溝1条 (溝27) を検出した。ピット20は調査区北西部で検出した。南半は埋設管で攪乱される。径0.5m、深さ約0.2mで、内部に径0.2mの根石を検出した。出土遺物が小片で時期は不明である。土坑21・22は径0.8~0.9m、深さ0.3~0.5mで、埋土は砂泥と粗砂層の互層堆積である。検出状況から樹木の抜取痕と考えられる。土坑23・26は攪乱が



- |    |                             |    |                          |    |                      |
|----|-----------------------------|----|--------------------------|----|----------------------|
| 1  | 10YR7/6明黄褐色粗砂 (現参道)         | 11 | 2.5Y5/4黄褐色粗砂 (旧参道)       | 21 | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫、炭混じり |
| 2  | 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 (埋設管埋土)     | 12 | 2.5Y4/4オリーブ褐色粗砂          | 22 | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、炭混じり |
| 3  | 2.5Y4/4オリーブ褐色粗砂             | 13 | 2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂・細砂 (旧参道) | 23 | 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、炭混じり   |
| 4  | 10YR4/4褐色砂泥                 | 14 | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、瓦混じり     | 24 | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、炭混じり |
| 5  | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥             | 15 | 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、炭・瓦混じり     | 25 | 10YR4/4褐色砂泥          |
| 6  | 10YR5/6黄褐色泥砂                | 16 | 2.5Y4/1黄灰色砂泥、炭・土師器混じり    | 26 | 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥        |
| 7  | 2.5Y5/4黄褐色泥砂、粗砂混じり          | 17 | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、炭混じり     | 27 | 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥        |
| 8  | 10YR4/3にぶい黄褐色細砂             | 18 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥          | 28 | 10YR5/6黄褐色砂泥 (地山)    |
| 9  | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、粗砂混じり (旧参道) | 19 | 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥         | 29 | 2.5Y5/6黄褐色砂泥 (地山)    |
| 10 | 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂、瓦混じり        | 20 | 10YR4/4褐色砂泥              |    |                      |

図9 5区遺構実測図 (1:60)

著しく詳細は不明である。土坑 25 は調査区中央の南壁際で検出した。東側は埋設管で攪乱され、南側は調査区外ため規模は不明であるが、深さ 0.45 m である。埋土から平安時代の瓦が出土した。溝 27 は調査区東側で検出した。溝の西肩部は一部埋設管および土坑 25 で攪乱される。検出長は 3.2 m、幅は 1.1 m 以上、深さ 0.5 m である。埋土は 4 層に分かれ、中層 (23 層) から平安時代中期の土師器や瓦、下層 (24 層) から古墳時代の土器小片も出土した。

#### 6区 (図 10、図版 3)

第1面 (地表下 0.1 m) では、柵 (ピット 4・5・12)、土坑 2 基 (土坑 2・16)、ピット 4 基 (ピット 1・3・6・8) を検出した。柵は南北 2 間分を検出した。径約 0.3m、深さ 0.3 ~ 0.45 m で、柱間は約 1.1m である。北・南側へ延びる。土坑 2 は円形で、径 0.7m、深さ 0.2m である。土坑 16 は南西側で検出した。規模は調査区外のため不明である。

第2面 (地表下 0.5 m) では、集石遺構 1 基 (集石 19)、小穴 10 基を検出した。小穴は直径約 0.1 m、深さ 0.2 m である。分布はランダムで性格・時期とも不明である。集石 19 は調査区中央の東壁際で西側の一部を検出した。規模確認のため拡張したが、東半は攪乱される。検出規模は径 0.95 m、深さ 0.15 m で、10 ~ 30 cm 大の石が円弧状に据えられる。時期は遺物が小片のため不明であるが、層位から平安時代から鎌倉時代に比定できる。

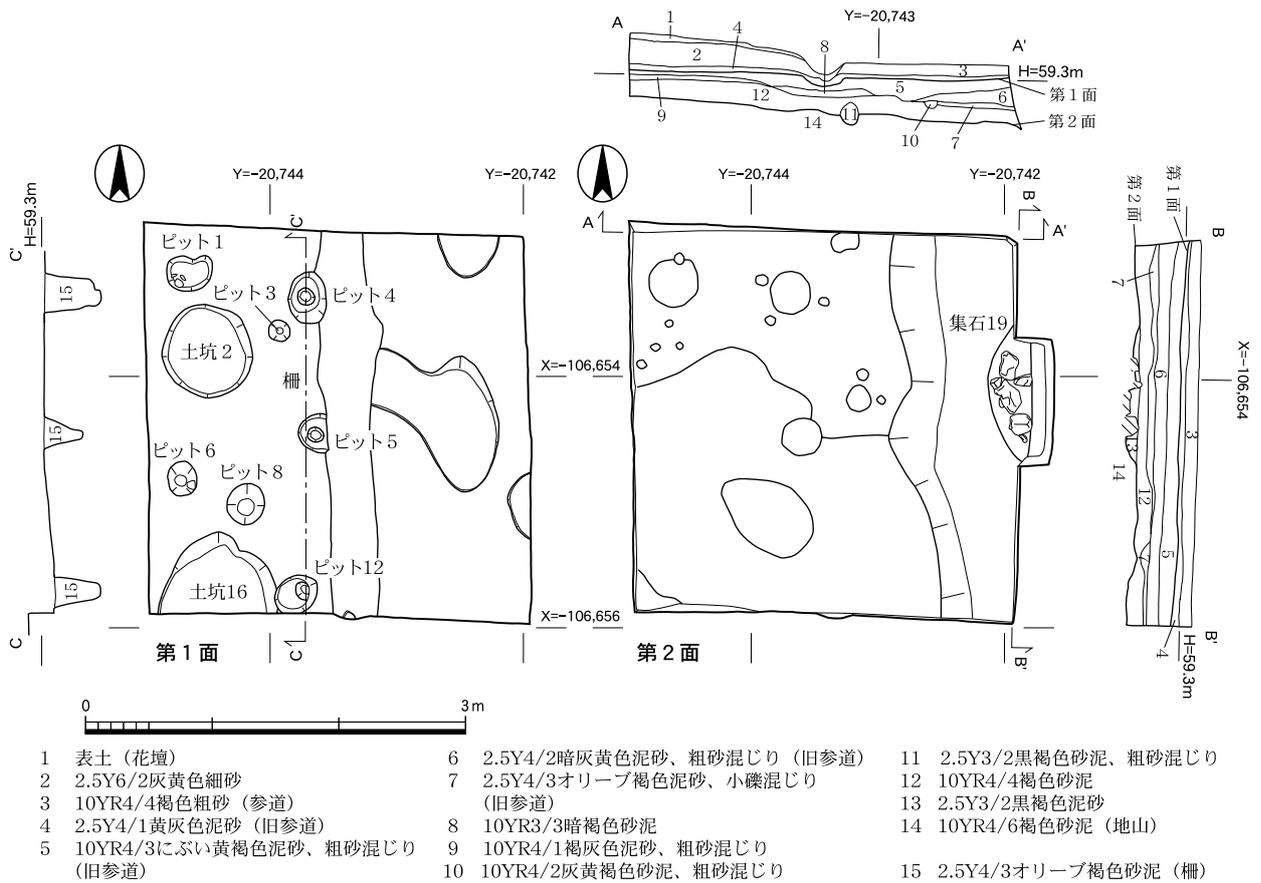


図10 6区遺構実測図(1:60)

平成20年度立会調査

本殿西築地西側のNo.10地点(図12、図版4-5)では、土坑を検出した。土坑は一辺約0.45mの方形、深さ0.5mである。埋土から江戸時代の土師器皿が出土した。

大炊所南東側のNo.18地点と参集殿北西側のNo.24地点で、旧参道の整地層を検出した。

参集殿北西側のNo.26地点では、地表下0.5mで路面を検出した。

平成21年度立会調査

直会殿南西側のNo.32地点(図版4-6)では、地表下0.15mで路面を検出した。

楼門南東側のNo.43~45地点では、地表下0.2~0.6mで平安時代後期の遺物包含層を検出した。

参集殿南東側のNo.58・59地点でも、地表下0.3~0.7mで平安時代後期・鎌倉時代の遺物包



図11 No.78地点立会調査風景(西から)

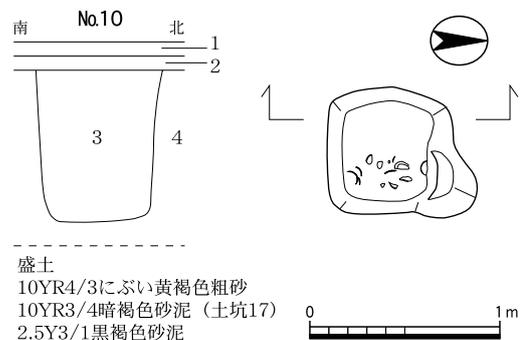


図12 No.10地点遺構実測図(1:40)

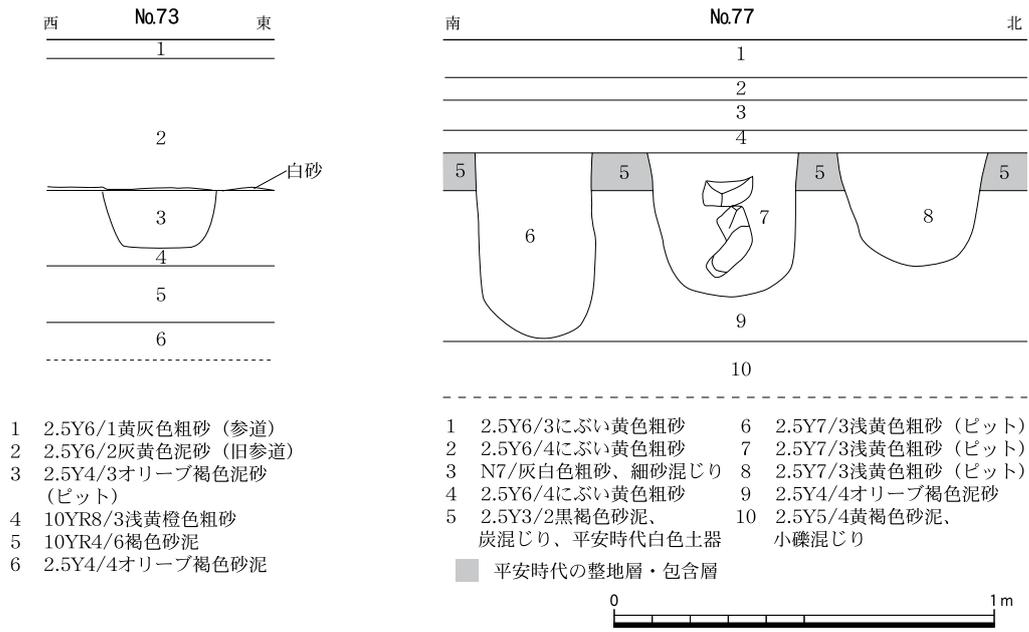


図 13 No. 73・77 地点断面図 (1:20)

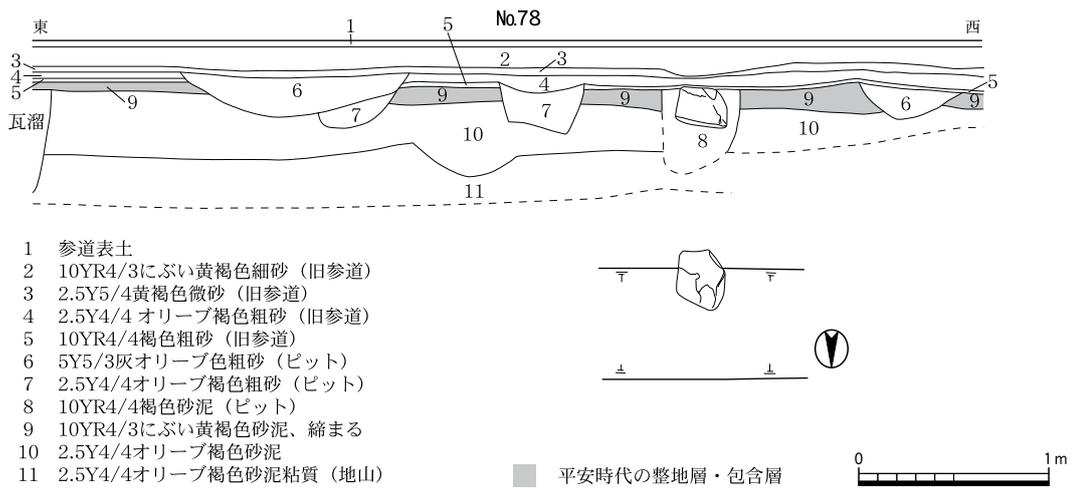


図 14 No. 78 地点遺構実測図 (1:40)

含層を検出した。

社務所西側のNo. 60・71 地点では、地表下 0.4 mで鎌倉時代の堅く締まった整地層を検出した。

三井神社南側のNo. 73 地点 (図 13、図版 4- 7) では、地表下 0.05 ~ 0.4 mで旧参道の整地が互層堆積し、一部に白砂を検出した。地表下 0.4 mでピットを検出した。埋土は粗砂で出土遺物はない。

神服殿北西側のNo. 77 地点 (図 13、図版 4- 8) では、地表下 0.3 mで南北方向にピットを 3 基検出した。幅 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.3 ~ 0.5 mで、ピット間は 0.5 mである。埋土はいずれも粗砂で出土遺物はない。うち 1 基で根石を検出した。さらに、地表下 0.3 ~ 0.4 mで平安時代の整地層も検出した。

神服殿北側のNo. 78 地点 (図 14、図版 5- 1) では、地表下 0.2 ~ 0.28 mで東西方向にピット

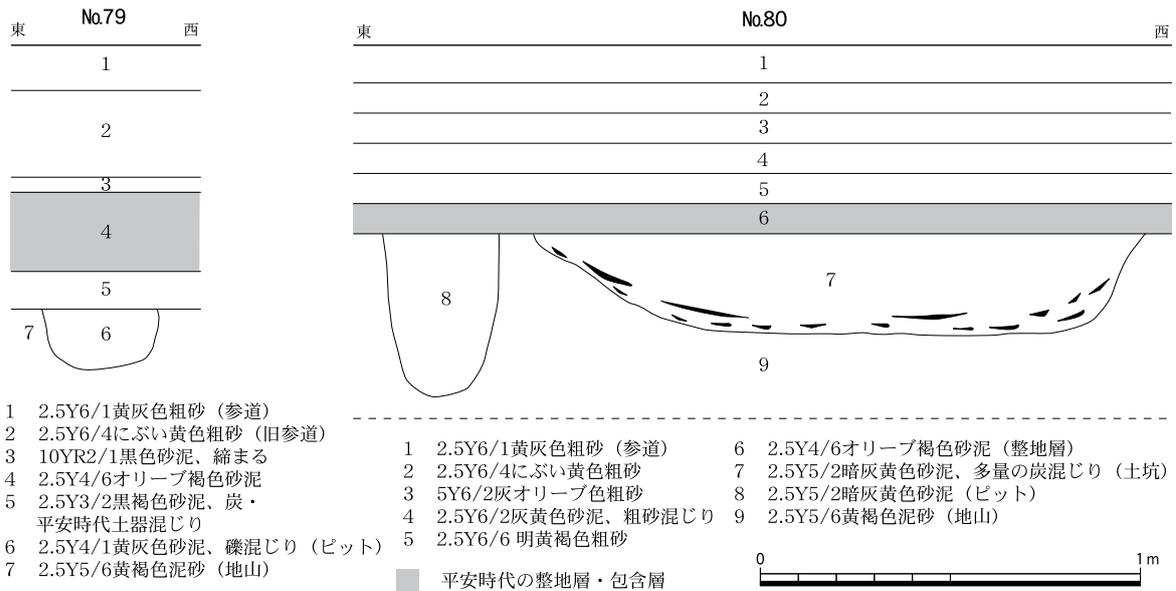


図 15 No. 79・80 地点断面図 (1:20)

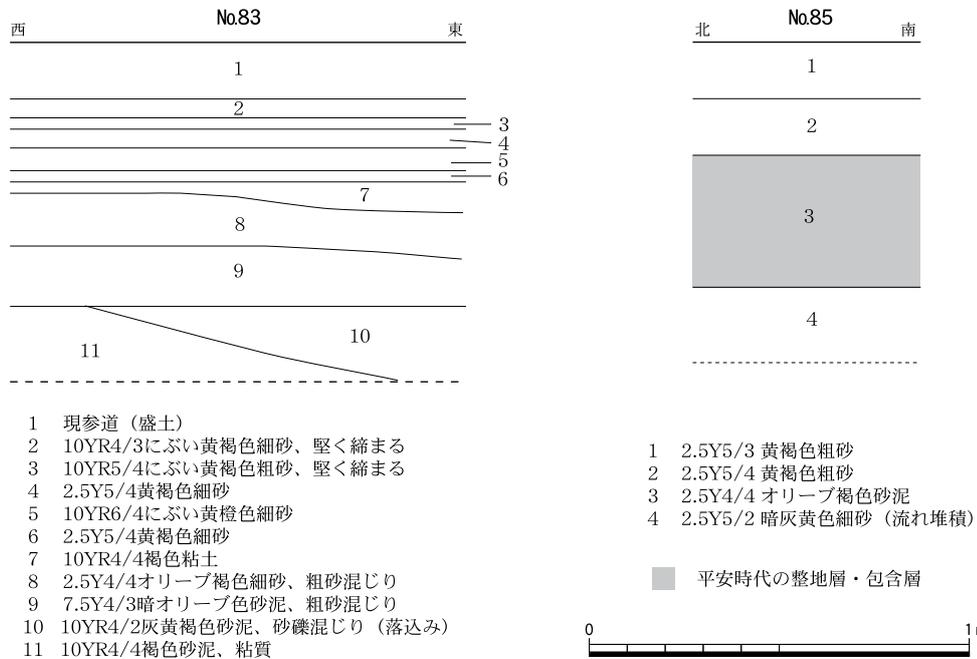


図 16 No. 83・85 地点断面図 (1:20)

を4基検出した。幅0.4～0.5m、深さ0.2～0.3mで、うち1基には0.3m大の礎石が据えられていた。ピットは約1mで等間に並ぶ。埋土から出土遺物は見られないが、断面観察から寛永五年(1628)頃の遺構と考えられる。

授与所南東側のNo. 79地点(図15)では、江戸時代の整地層下0.4～0.6mで平安時代の包含層を検出した。さらに下層0.7mでピットを検出した。出土遺物はないが、平安時代かそれ以前の遺構と考えられる。

授与所南東側のNo. 80地点(図15、図版5-2)では、地表下0.4mで平安時代の堅く締まった整地層を検出した。土師器小片が出土した。その下層0.5mでピット・土坑を検出した。ピット

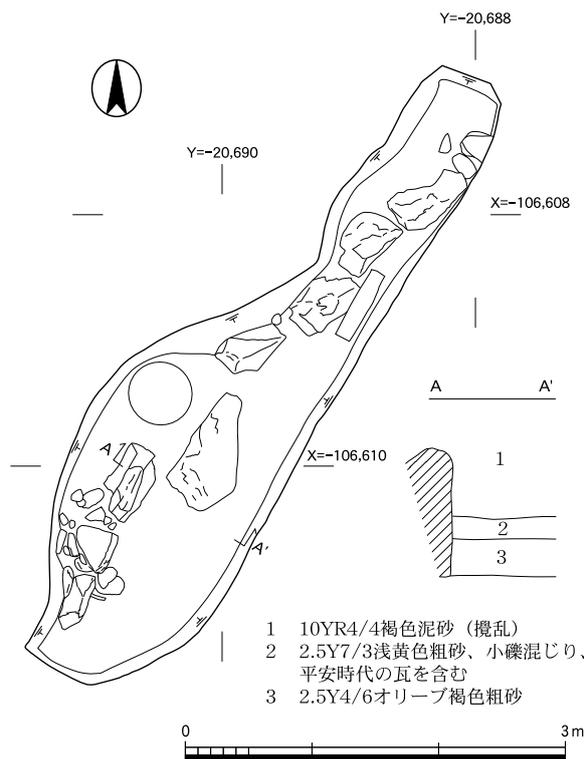


図 17 No. 84 地点石列実測図 (1 : 60)

- 1 10YR4/4褐色泥砂 (攪乱)
- 2 2.5Y7/3浅黄色粗砂、小礫混じり、平安時代の瓦を含む
- 3 2.5Y4/6オリーブ褐色粗砂

は幅 0.3 m、深さ 0.43 m である。土坑は幅 1.6 m、深さ 0.28 m で埋土には炭が多く含まれていた。出土遺物はないが、平安時代もしくはそれ以前かである。

朱印所南西側の No. 83 地点 (図 16) では、江戸時代の参道の整地層下 0.7 m で東へ向かって落ち込む西肩を検出した。埋土から平安時代の瓦が出土した。

御手洗川曲橋西側の No. 84 地点 (図 17、図版 5-3・5-4) では、地表下 0.3 m で北東から南西方向に約 5 m にわたり石を 7 石検出した。石は平面で 0.4 ~ 0.7 m 大で、石材はいずれもチャート石で、東面する土留めと考えられる。掘形の裏込めには 0.1 ~ 0.3 m 大の石が見られた。石列は東へ曲がり、御手洗川へ向かう。掘削深度の制限があり、一部の

み埋土の掘り下げを行った。石は縦に約 1 m を測り、縦位に使われている。調査後、工事に支障ない部分は土嚢で養生して埋め戻した。

東御料屋南東側の No. 85 地点 (図 16) では、地表下 0.3 ~ 0.65 m で平安時代の包含層、下層で平安時代の流れ堆積を検出した。

#### 平成 22 年度立会調査

神服殿西側の No. 91 地点 (図 18) では、地表下 0.3 m で桃山時代から江戸時代前期の土師器皿・羽釜、0.6 m で古墳時代の土師器高杯・甕を含む包含層を検出した。

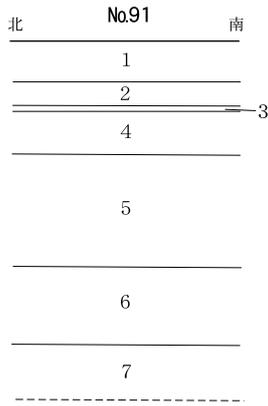
神服殿北西側の No. 95 地点 (図 18) では、地表下 0.18 m でピットを 1 基検出した。神服殿南西側の No. 97 地点 (図 18) では、地表下 0.18 m でピットを 2 基検出した。3 基とも埋土は砂のみで遺物はない。断面から寛永六年 (1629) 以降の遺構と判明した。

神服殿北西側 No. 94 ~ 96 地点 (図 18) では、地表下 0.18 ~ 0.23 m で室町時代の土師器皿細片を多量に含む包含層を検出した。包含層の厚さは 0.15 ~ 0.2 m である。

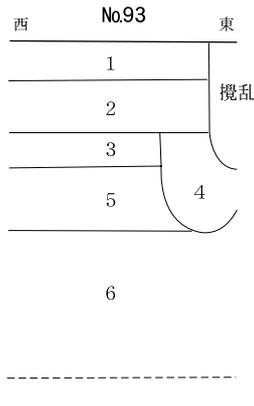
出雲井於神社北東側の No. 99 地点 (図 18) では、地表下 0.14 m で土坑を検出した。土坑は東西 1.3 m、深さ 0.62 m で、西は攪乱を受ける。埋土から室町時代の土師器皿が出土したが、断面の観察から中世以降のものとする。

神服殿北東側の No. 104 地点 (図 18、図版 5-5) では、地表下 0.28 m で土坑を検出した。土坑は南北 0.8 m、深さ 0.58 m で、北に拡がる。粗砂を主体とした埋土から江戸時代の菊文小丸瓦などの瓦類と土師器小片が出土した。

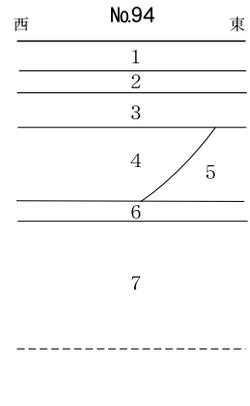
神服殿東側の No. 106 地点 (図 19) では、地表下 0.26 m でピットを 2 基検出した。ピット 1 は



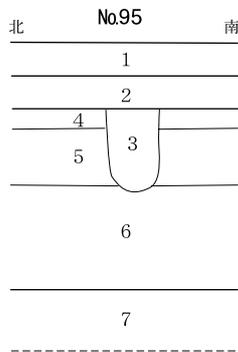
- 1 2.5Y4/4オリーブ褐色砂
- 2 10YR5/6黄褐色砂
- 3 7.5YR4/3褐色砂泥、粗砂・焼土・炭混じり
- 4 10YR5/4にぶい黄褐色砂
- 5 10YR4/4褐色砂泥、砂・炭・土師器片混じり
- 6 10YR4/4褐色・10YR3/3暗褐色砂泥、古墳時代の高杯・甕出土
- 7 10YR4/6褐色砂泥粘質、φ3~5cmの礫混じり



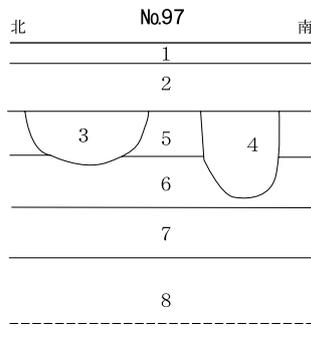
- 1 2.5Y4/3オリーブ褐色砂
- 2 10YR5/6黄褐色砂、下層は粗砂層
- 3 10YR4/4褐色砂、土師器片含む
- 4 10YR4/4褐色砂、小礫少量含む (ピット)
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂粘質
- 6 10YR4/4褐色砂、φ0.5~5cmの礫含む



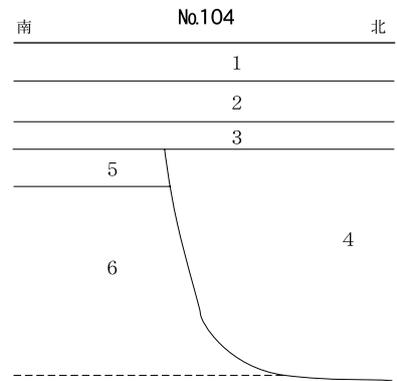
- 1 2.5Y4/3オリーブ褐色砂
- 2 10YR5/6黄褐色砂、下層は粗砂層
- 3 10YR4/4褐色砂、土師器片含む
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂粘質、炭・土師器細片多量に含む
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂粘質
- 6 10YR4/4褐色砂泥粘質
- 7 10YR4/4褐色砂、φ0.5~5cmの礫含む



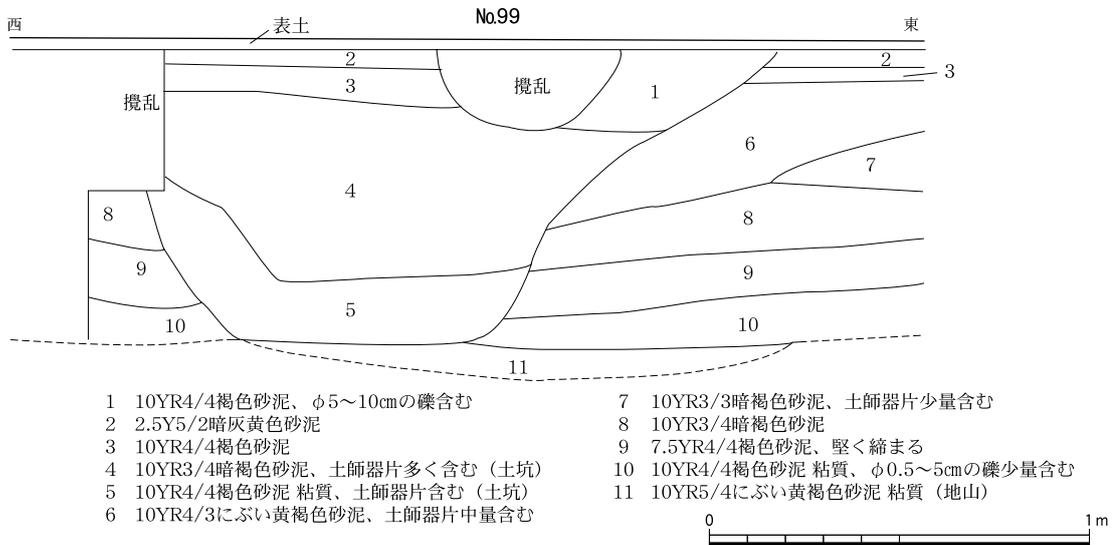
- 1 2.5Y4/3オリーブ褐色砂
- 2 10YR5/6黄褐色砂、下層は粗砂層
- 3 10YR6/6明黄褐色砂 (ピット)
- 4 10YR4/4褐色砂、土師器片含む
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂粘質、炭・土師器細片多量に含む
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂粘質
- 7 10YR4/4褐色砂、φ0.5~5cmの礫含む



- 1 2.5Y5/2暗灰黄色砂、堅く締まる
- 2 10YR5/6黄褐色砂
- 3 10YR6/6明黄褐色砂 (ピット)
- 4 2.5Y6/4にぶい黄色砂 (ピット)
- 5 2.5Y4/3オリーブ褐色砂、粗砂・近世瓦含む
- 6 10YR4/4褐色泥砂粘質、炭・土師器片少量含む
- 7 10YR3/3暗褐色泥砂粘質
- 8 10YR3/4暗褐色砂、φ3~5cmの礫多量含む

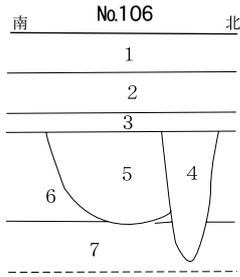


- 1 2.5Y5/2暗灰黄色砂
- 2 2.5Y5/4黄褐色細砂
- 3 10YR6/6明黄褐色細砂
- 4 10YR4/4褐色砂~粗砂、小礫・近世瓦・土師器片含む (土坑)
- 5 10YR4/4褐色砂泥粘質、土師器小片・炭含む
- 6 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥粘質

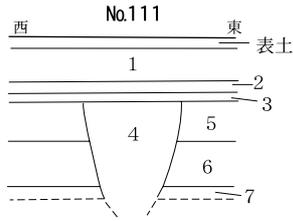


- 1 10YR4/4褐色砂泥、φ5~10cmの礫含む
- 2 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥
- 3 10YR4/4褐色砂泥
- 4 10YR3/4暗褐色砂泥、土師器片多く含む (土坑)
- 5 10YR4/4褐色砂泥粘質、土師器片含む (土坑)
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、土師器片中量含む
- 7 10YR3/3暗褐色砂泥、土師器片少量含む
- 8 10YR3/4暗褐色砂泥
- 9 7.5YR4/4褐色砂泥、堅く締まる
- 10 10YR4/4褐色砂泥粘質、φ0.5~5cmの礫少量含む
- 11 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥粘質 (地山)

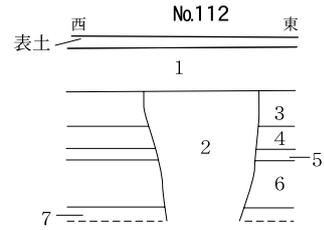
図 18 No. 91・93~95・97・99・104 地点断面図 (1:20)



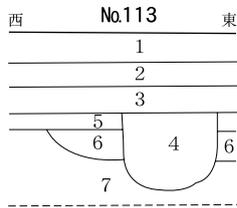
- 1 2.5Y5/2暗灰黄色砂
- 2 2.5Y5/4黄褐色細砂
- 3 10YR6/6明黄褐色細砂
- 4 10YR6/6明黄褐色砂泥、砂分多い (杭跡)
- 5 10YR4/4褐色砂泥、砂分多い (ピット)
- 6 10YR4/4褐色砂泥 粘質
- 7 10YR4/6褐色砂泥 粘質



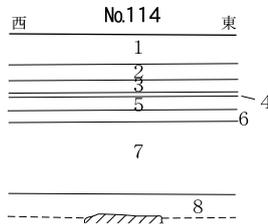
- 1 2.5Y5/4黄褐色砂、堅く締まる
- 2 10YR4/6褐色砂
- 3 10YR4/6褐色細砂
- 4 10YR4/4褐色砂 (ピット)
- 5 10YR5/4にぶい黄褐色砂、粗砂～小礫含む
- 6 10YR5/2灰黄褐色砂泥 粘質
- 7 10YR4/6褐色砂泥、土師器片含む



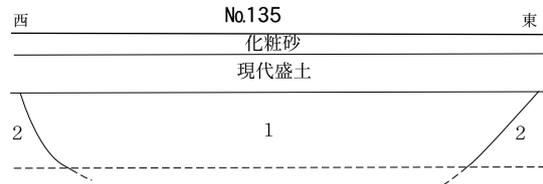
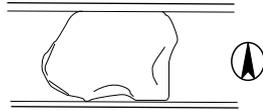
- 1 2.5Y5/4黄褐色砂、堅く締まる
- 2 10YR4/4褐色砂、焼土か・赤土を含む (ピット)
- 3 10YR4/6褐色砂
- 4 10YR4/6褐色細砂
- 5 10YR4/6褐色砂
- 6 10YR5/4にぶい黄褐色砂、粗砂～小礫多量に含む
- 7 10YR4/4褐色砂、5Y5/3灰オリーブ色細砂が薄い層で堆積



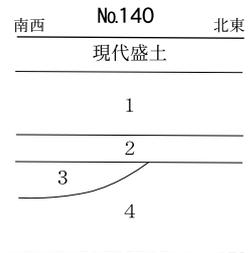
- 1 10YR4/4褐色砂
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色細砂
- 3 10YR6/4にぶい黄橙色砂
- 4 10YR6/4にぶい黄橙色砂、10YR4/4褐色砂が互層に入る (ピット)
- 5 10YR5/4にぶい黄褐色砂
- 6 10YR4/4褐色砂、粗砂～小礫含む
- 7 10YR3/2黒褐色砂質土、7.5YR4/3褐色泥砂ブロック入る



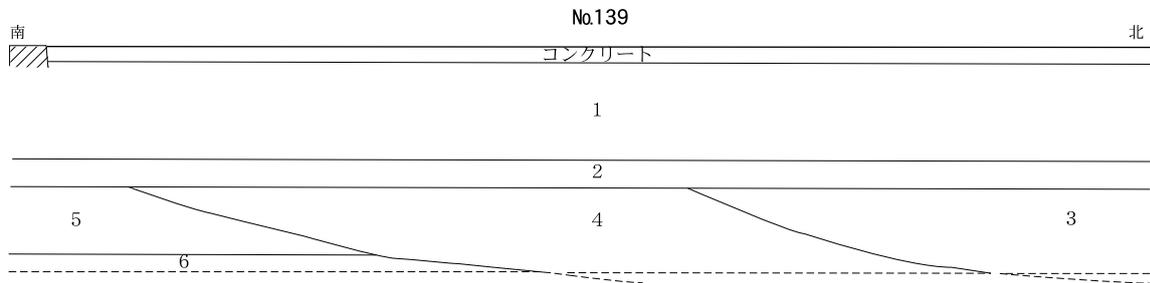
- 1 10YR4/4褐色砂
- 2 2.5Y7/3浅黄色砂
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色砂
- 4 10YR6/4にぶい黄橙色砂
- 5 10YR4/4褐色砂
- 6 2.5Y4/2暗灰黄色砂
- 7 10YR4/4褐色砂
- 8 10YR4/6褐色砂質土



- 1 10YR4/4褐色シルト、土師器小片多量含む (土坑)
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色シルト、土師器片含む



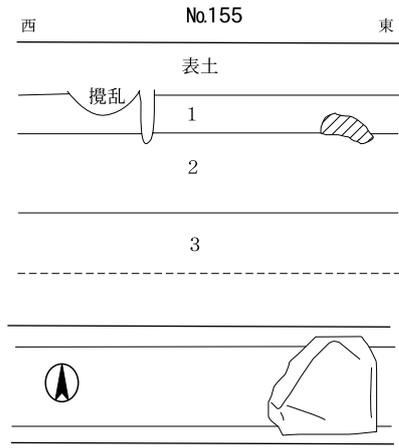
- 1 10YR4/4褐色シルト
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
- 4 10YR3/4暗褐色シルト



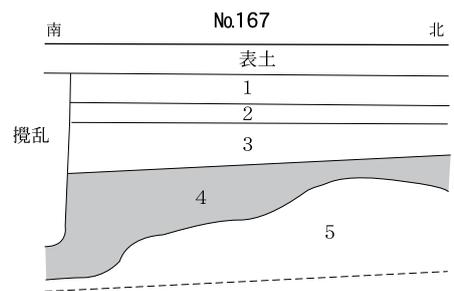
- 1 10YR4/4褐色シルト
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂
- 3 10YR2/2黒褐色シルト、古墳時代の土師器含む
- 4 10YR3/3暗褐色シルト、小礫含む
- 5 10YR3/4暗褐色シルト
- 6 10YR4/6褐色シルト (地山)



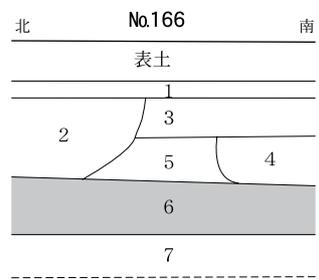
図19 No.106・111～113・135・139・140 地点断面図、No.114 地点遺構実測図 (1:20)



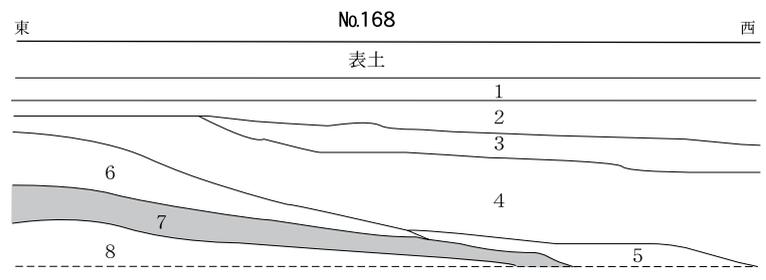
- 1 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂
- 2 10YR4/4褐色砂
- 3 10YR4/4褐色砂泥 粘質、粗砂ブロック・土師器片含む



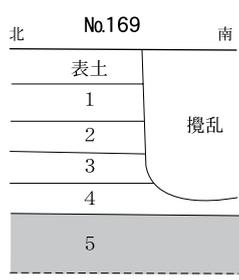
- 1 10YR6/6明黄褐色砂
- 2 10YR3/4暗褐色砂質土、10YR4/4褐色砂泥が互層に入る
- 3 10YR5/3にぶい黄褐色砂、粗砂含む
- 4 10YR3/3暗褐色砂泥、平安時代の土師器含む
- 5 7.5YR4/4褐色シルト



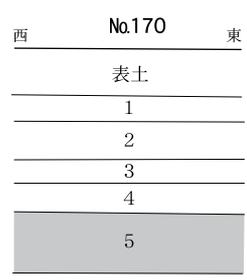
- 1 10YR6/6明黄褐色砂
- 2 10YR3/2黒褐色砂泥、10YR6/6明黄褐色砂が入る（土坑）
- 3 10YR6/4にぶい黄橙色細砂
- 4 10YR3/3暗褐色粗砂（ピット）
- 5 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥、粗砂中量含む
- 6 10YR3/3暗褐色砂泥、平安時代の土師器含む
- 7 7.5YR4/4褐色シルト



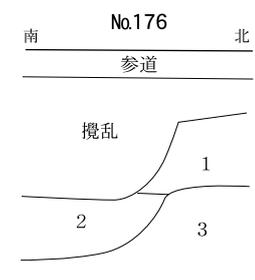
- 1 10YR6/6明黄褐色砂
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色砂
- 3 10YR4/4褐色粗砂
- 4 10YR5/6黄褐色砂質土
- 5 7.5YR4/4褐色砂泥
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 7 7.5YR3/2黒褐色砂泥、平安時代土師器・炭含む
- 8 10YR4/4褐色シルト



- 1 10YR5/6黄褐色細砂
- 2 10YR4/4褐色粗砂
- 3 10YR4/4褐色砂
- 4 10YR4/4褐色砂泥、砂分多い
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、7.5YR3/2黒褐色砂泥、平安時代土師器・炭含む



- 1 10YR5/6黄褐色細砂
- 2 10YR4/4褐色粗砂
- 3 10YR4/4褐色砂
- 4 10YR4/4褐色砂泥、砂分多い
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、7.5YR3/2黒褐色砂泥、平安時代土師器・炭含む
- 6 10YR4/4褐色シルト



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、φ0.5~2cmの小礫含む
- 2 10YR4/4褐色砂、φ0.5~3cmの礫多量含む（土坑）
- 3 10YR4/6褐色シルト

■ 平安時代の包含層



図 20 No.155 地点遺構実測図、No.166～170・176 地点断面図（1：20）

南北 0.14 m、深さ 0.36 mと細長く、埋土は砂で、杭か柱跡と考えられる。ピット 2 は南北 0.32 m以上、深さ 0.22 mで、北側はピット 1 で攪乱を受ける。寛永期の整地層上面で検出しており、寛永期のものとする。

舞殿南側のNo. 111 ~ 113 地点 (図 19) では、それぞれ地表下 0.17 m、0.14 m、0.21 mでピットを各 1 基検出した。規模は東西 0.24 m・深さ 0.28 m以上、東西 0.3 m・深さ 0.35 m以上、東西 0.25 m・深さ 0.23 mで、埋土は砂である。

舞殿南東側のNo. 114 地点 (図 19、図版 5-6) では、地表下 0.48 mで礎石を検出した。礎石は東西 34 cm、南北 24 cmあり、材質は花崗岩である。

三井神社本殿北側のNo. 135・142 地点 (図 19) では、それぞれ地表下 0.15 m、0.1 mで土坑を検出した。東西 1.4 m、深さ 0.4 m以上あるこの土坑は、No. 142 地点がNo. 135 地点のほぼ 1 m南に位置することから同じ土坑であるとする。埋土は室町時代(15世紀)の土師器小片を多く含む。

三井神社棟門下のNo. 139 地点 (図 19、図版 5-7) では、寛永期の整地層と、それより古い化粧砂、その下の地表下 0.37 mで北に下がる落込み遺構を検出した。落込み遺構は南北 3.7 m以上、深さ 0.24 m以上あり、北に延長する。埋土は 2 層あり、上層で古墳時代の高杯が出土した。

三井神社棟門北側のNo. 140 地点 (図 19) では、地表下 0.32 mで中世の整地層を検出、No. 139 地点で検出した古墳時代の落込みはなかった。

出雲井於神社の社周り (北・西・南) のNo. 149 ~ 151 地点では、地表下 0.08 ~ 0.12 mで室町時代の土師器片を多く含む包含層を検出した。この出雲井於神社は基礎の整地層が周囲より 0.3 ~ 0.4 m高く盛土されており、寛永五年 (1628) の造り替えの際に付近から運んできたものであろう。

西御料屋南東側のNo. 155 地点 (図 20、図版 5-8) では、地表下 0.24 mで寛永期の化粧砂下層で石を検出した。石は東西 28 cm、南北 25 cm以上、厚さ 20 cmあり、北に石が続き石列となる。縁石の可能性はある。

これより東の三言社北西側のNo. 159 地点では、地表下 0.34 mで平安時代の白色土器を含む包含層を検出した。

また、No. 159 地点の東、三言社東側のNo. 166・167 地点 (図 20) で、地表下 0.3 ~ 0.36 mで平安時代中期後半の土師器皿を含む暗褐色砂泥の包含層を検出した。この層は南に落ち込み、検出面より、0.7 m南で配管の攪乱を受ける。

さらにこの地点より東のNo. 168 地点 (図 20) でも、同様の包含層が地表下 0.36 ~ 0.58 mで検出した。包含層は西に低くなり、掘削面より下がる。この包含層は東に続き一言社東側のNo. 169・170 地点 (図 20) でも地表下 0.44 mで検出している。

大炊所南東側のNo. 176 地点 (図 20) では、地表下 0.38m で土坑を検出した。土坑は東西 0.5 m、深さ 0.18 m以上で東は攪乱を受ける。土師器小片にて時期不明。

## 4. 遺物

遺物は整理箱に13箱出土した。土器類が多く、その他に瓦類や少量の金属製品がある。土器類では土師器皿が大半を占め、次いで白色土器が多く、須恵器・焼締陶器・施釉陶器・磁器が出土した。時期は古墳時代から明治時代である。瓦類は江戸時代のもが多く、平安時代のもも出土している。土器の型式年代は、当研究所『研究紀要』第3号「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」に準じる。

### (1) 土器類

#### 古墳時代の土器（図21、図版6）

古墳時代の土器類は少量で、図示できた個体は4点ある。1～3は高杯で、ともに脚部のみ残存する。1は出土後の遺存状態が悪く、図は出土状況から器形を復元した。杯の体部は底部から外反しながら大きく開く形となる。残存する脚の上部には3箇所径1cmの透かし穴が穿たれる。2は脚上端部で磨滅が著しく、調整痕などは不明、胎土には粒砂が混じる。3は脚部上端の杯部接合面には接着を強固にするための圧痕を付ける。表面はナデ調整のハケ目がつき、1に比較すると裾が広がる。4は小型丸底甕である。底部から体部にかけて丸く、口縁は短く外反する。古墳時代前期に属す。1・4は神服殿西側のNo.91地点、2・3は棟門下のNo.139地点から出土。

#### 平安時代から鎌倉時代前期の土器（図22、図版6・7）

中門内の一言社周囲・楼門南東側・東御料屋南東側でまとまって出土した。

土師器には、皿A（5～11・22～24）、皿Ac（25・33）、皿N（12～21・26～32・34～40）がある。5は皿Aで、口径11.0cm。Ⅲ期新に属す。5区溝27出土。6は皿Aの小片で、底部裏面に墨書があるが判読不能である。Ⅳ期新に属す。三言社東側のNo.167地点出土。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器		土師器4点	7箱	
平安時代	土師器、白色土器、須恵器、瓦類		土師器36点、白色土器21点、須恵器1点、軒丸瓦3点、軒平瓦5点		
鎌倉時代～室町時代	土師器、輸入磁器		土師器23点		
桃山時代～江戸時代	土師器、瓦類		土師器9点、軒丸瓦3点、軒平瓦1点	6箱	
江戸時代中期～後期	土師器、瓦類、金属製品		土師器8点、軒丸瓦2点、飾り金具1点		
明治時代以降	施釉陶器		施釉陶器1点		
合計		16箱	118点（3箱）	13箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より3箱多くなっている。

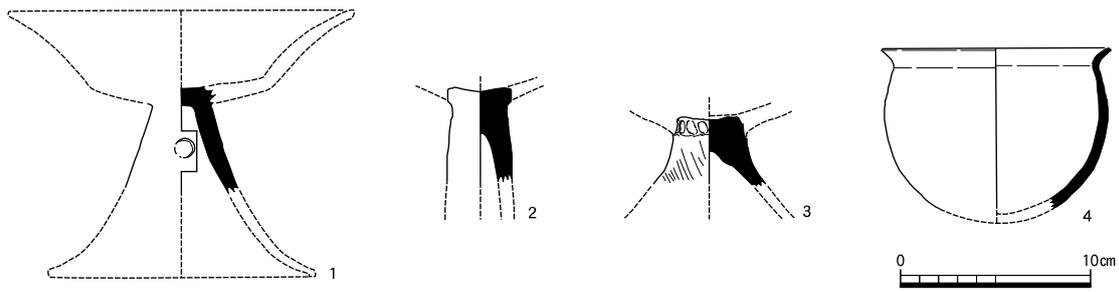


図 21 土器実測図 1 (1 : 4)

7～11は皿 A である。7は口径 10.2 cm、8は口径 10.4 cmで、いずれも粗雑な作りである。9・10は口径 11.2 cm、11.8 cmで、やや大振りである。11は口径 10.0 cmで、器壁が厚く胎土は粗い。12～21は皿 N で、口径 9.2～9.4 cm (12・13)、口径 11.4～13.6 cm (14～17)、口径 14.2～15.6 cm (18～21) の 3 群がある。口縁部が外反し、二重のナデ調整を残す。14・15の口縁部には煤が付着する。7～21はIV期中～新に属す。7～20は一言社のNo. 167～170 地点、21は東御料屋南東側のNo. 85 地点出土。

22・23は皿 A で、口径 10.8 cm、10.7 cmである。IV期新～V期古に属す。24は皿 A で、口径 9.0 cmである。25は皿 Ac で、口径 10.2 cmである。26～29は皿 N で、口径 9.6 cm、9.8 cm、11.4 cm、17.0 cmである。29は大型である。24～29はV期古～中に属す。30～32は皿 N で、口径 8.2～10.0 cmである。33は皿 Ac で、口径 8.8 cmである。30～33はV期中～新に属す。34～38は皿 N で、口径 8.8～9.0 cm (34・35)、口径 11.0 cm (36)、口径 13.6 cm (37・38) の 3 群がある。VI期古～中に属す。39は皿 N で、口径 13.0 cmである。VI期中～新に属す。40は皿 N で、口径 12.0 cmである。VII期中に属す。22～30・33～40は楼門南東側のNo. 43～45 地点出土、31・32は出雲井於神社内のNo. 149・150 地点出土。

白色土器には皿 (41～44・46～48・52～57) と椀 (45)、三足皿 (58)、台付き皿 (59)、高杯 (49～51・60・61) がある。高杯以外はロクロ成形で、底部外面には糸切り痕を残す。41はほぼ完形で、底部は厚く、口縁内面上部には粘土が垂れたままの粗雑作りである。46～48の底部は円盤状高台である。49は下部が欠損しているが高杯の杯部である。直線的に開き口縁端部は丸くおさまる。体部から底部にかけてナデ痕の段がつく。50は杯部と脚部の接合部、51・61は脚部の面取りがある。58・59は底部から外側に脚・高台を貼り付ける。41～51はIV期中～新、54・60・61はV期古～中に属す。52・53・55～59はVI期古～中に属す。41～43・45・47～49は一言社周囲のNo. 167～170 地点、44・46・50・51は東御料屋南東側のNo. 85 地点、52～61は楼門南東側のNo. 43～45 地点出土。

62は須恵器杯 A で口径 13.7 cm、器高 2.9 cm、胎土は硬質で灰白、体部から直線的に開く。V期古～中に属す。楼門南東側のNo. 43～45 地点出土。

#### 鎌倉時代中頃から室町時代の土器 (図 23、図版 7)

主な出土地点は参集殿南側、神服殿西側、三井神社本殿北側で、特に、出雲井於神社敷地内では室町時代の土師器の小片が多量に出土した。

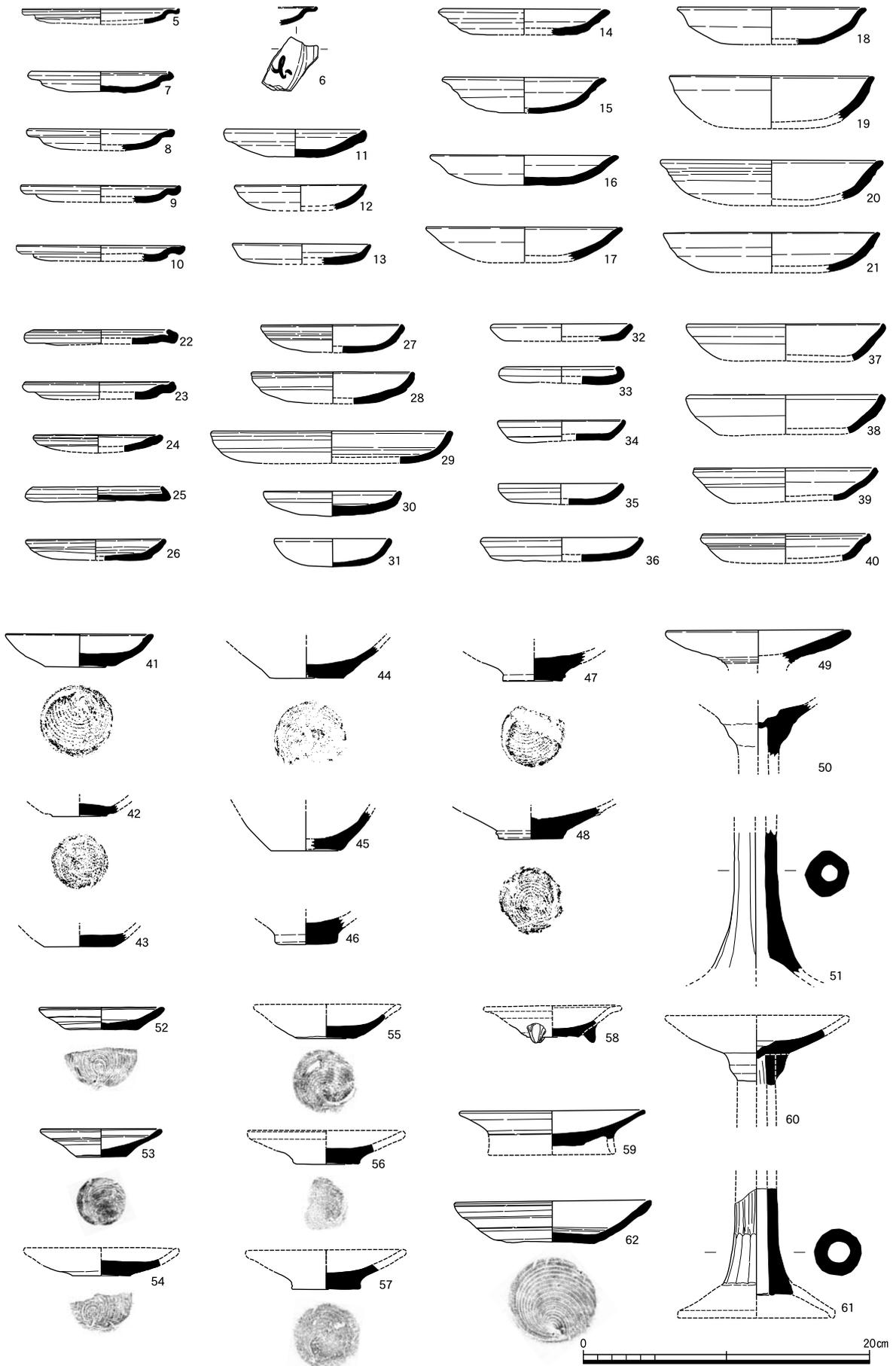


图 22 土器实测图 2 (1 : 4)

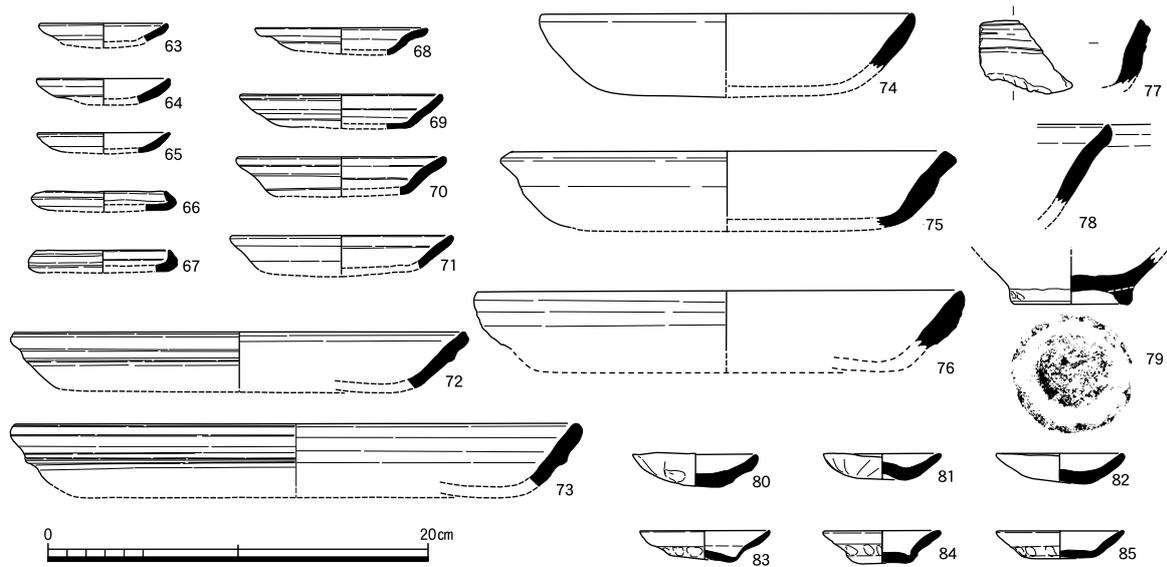


図 23 土器実測図 3 (1 : 4)

鎌倉時代の土器には、土師器皿 Ac (66・67)、皿 N (63～65・68～71)、皿 N 大 (72～78)、椀 (79) がある。皿 Ac は口径 7.6～7.8 cm、皿 N は口径 6.8～11.7 cm 前後である。皿 N 大は口径 19.3～30.0 cm 前後である。京域内では出土例があまりない器形で全体に大振り器壁が厚く、底を上げるものもあり、72・73 には体部外側面に成形時にできた突帯状の痕跡が残る。79 は内外面に布目痕が残り、高台を貼り付けた成形時の指圧痕が残る。Ⅶ期古～中に属す。63～73 は参集殿南側の No. 59 地点付近、76 は又蔵南西側の No. 180 地点、74・75・77・78 は出雲井於神社内の No. 150 地点、79 は大飯所北側の No. 127 地点出土。

室町時代の土器には、土師器皿 Nr (80～82)、皿 N (83～85) がある。皿 Nr は口径 6.1～6.6 cm、いずれも器壁が厚く、体部内外面に布目や布の折り目の痕跡が見られる。80 は体部外面に指の圧痕。81 はへソ皿に似せて底部を凹ませる。ともに口縁部に煤が付着する。皿 N は口径 6.2～6.8 cm、体部は底部から立ち上がり強く屈曲して外に開く。体部外面下部に指の圧痕がつく。Ⅹ期古～中に属す。80～82 は神服殿西側の No. 99 地点、83・84 は出雲井於神社内の No. 150 地点出土。

#### 桃山時代から江戸時代前期の土器 (図 24、図版 7)

土師器皿 Nr (86)、皿 S (87～93)、羽釜 (94) がある。86 は口径 6.8 cm、87 は口径 6.2 cm、88 は口径 7.6 cm で、底部に圈線が巡る。89・90 は口径 7.4 cm、8.0 cm で、ともに器壁は非常に薄い。90 は一部口縁が歪み大きく反り返り、底部には圈線が巡る。91 は口径 10.4 cm、92 は口径 11.6 cm、93 は口径 12.4 cm、体部は底部から直線的に開く。94 の羽釜は口縁部と底部が欠損しており、体部のみ遺存する。体部下部内外面に指の圧痕があり、鏝が付く。外面に煤が付着する。Ⅺ期古～中に属す。86・87・89・91・93 は神服殿西側の No. 91・92 地点、90・92 は東御料屋北側の No. 89 地点、88 は出雲井於神社内の No. 150 地点出土。

#### 江戸時代中期から後期・明治時代以降の土器 (図 24、図版 7)

土師器には皿 Nr (95～97・99～101)、皿 S (98・102) がある。

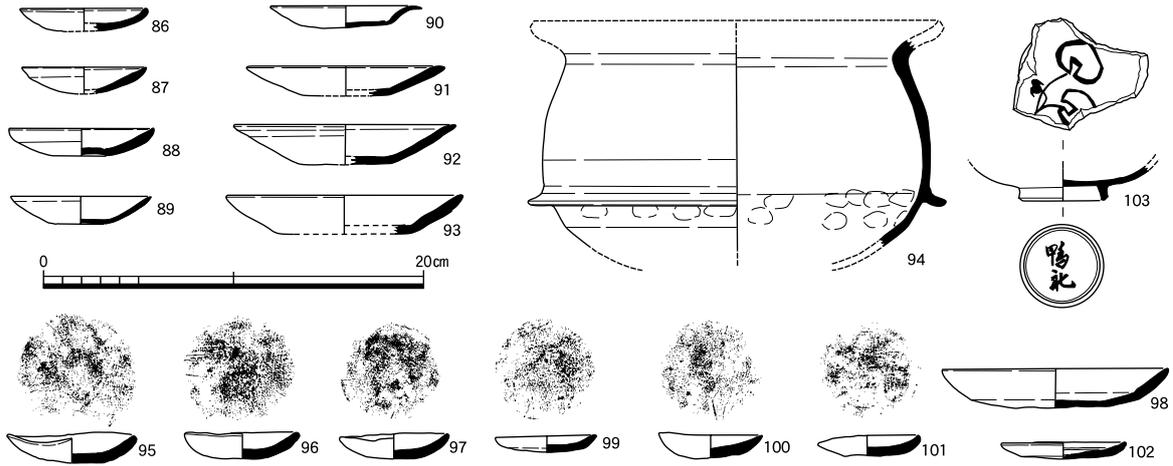


図 24 土器実測図 4 (1 : 4)

95～97は皿Nrである。皿Nrは、この他に掲載はしていないが、口径7.0cm前後、6.0～6.5cm前後、5.5～6.0cm前後の3群に分類できる。いずれも内外面には布目痕を残す。Ⅻ期新に属す。本殿西築地西側のNo.10地点出土。

98は皿Sで、口径12.0cmである。圏線は細い棒状の工具を使って付けられる。Ⅻ期中～新に属す。99～101は皿Nrで、口径5.2～5.4cmである。いずれも内面に布目痕を残す。99・100は期中～新、101は期以降に属す。98～101は出雲井於神社南東側のNo.150・151地点出土。

102は口径6.6cm、扁平で圏線が巡る。期中以降に属す。楼門西廻廊西側のNo.54地点出土。

103は施釉陶器の京焼椀である。底部のみ遺存する。見込みにはフタバ葵、底部外面には「鴨社」の銘がコバルト釉で描かれている。東御料屋東側のNo.86地点出土。明治以降。

## (2) 瓦類 (図 25、図版 8)

瓦には平安時代中期・後期と江戸時代の瓦がある。

瓦1は均整唐草文軒平瓦である。瓦2と同じく、中心飾りにC字で「栗」銘が入るものと思われるが、文様は欠損して不明である。唐草は複線で中心飾り下部から伸びていると思われる。外区は珠文が巡る。胎土は硬質である。栗栖野瓦窯産。2区3層出土。瓦2は均整唐草文軒平瓦である。中心飾りはC字で「栗」銘が入る。唐草文は複線で各単位は離れ、中心飾り下部から伸びて左右に3回転すると思われる。外区は珠文が巡る。胎土はやや軟質で粒砂混じりである。栗栖野瓦窯産。5区16層出土。瓦3は蓮華文軒丸瓦である。単弁10葉で、中房は扁平で、蓮子は不明である。珠文11である。胎土はやや軟質で粒砂混じりである。3区拡張埋土。瓦4は蓮華文軒丸瓦である。単弁で子葉は不明。蓮子は1である。珠文はない。胎土はやや軟質である。No.84地点石列2層出土。瓦5は巴文軒丸瓦である。巴は左巻きで頭は接しない。珠文はない。瓦当は扁平である。胎土は軟質で粒砂が混じる。No.84地点の2層出土。瓦6は均整唐草文軒平瓦である。中心飾りに三巴を配する。界線は上側のみ、珠文はない。瓦当は半折り曲げ。胎土は硬質で2～3mmの礫が混じる。1区2層出土。瓦7は唐草文軒平瓦である。瓦当は半折り曲げで幅が狭い。

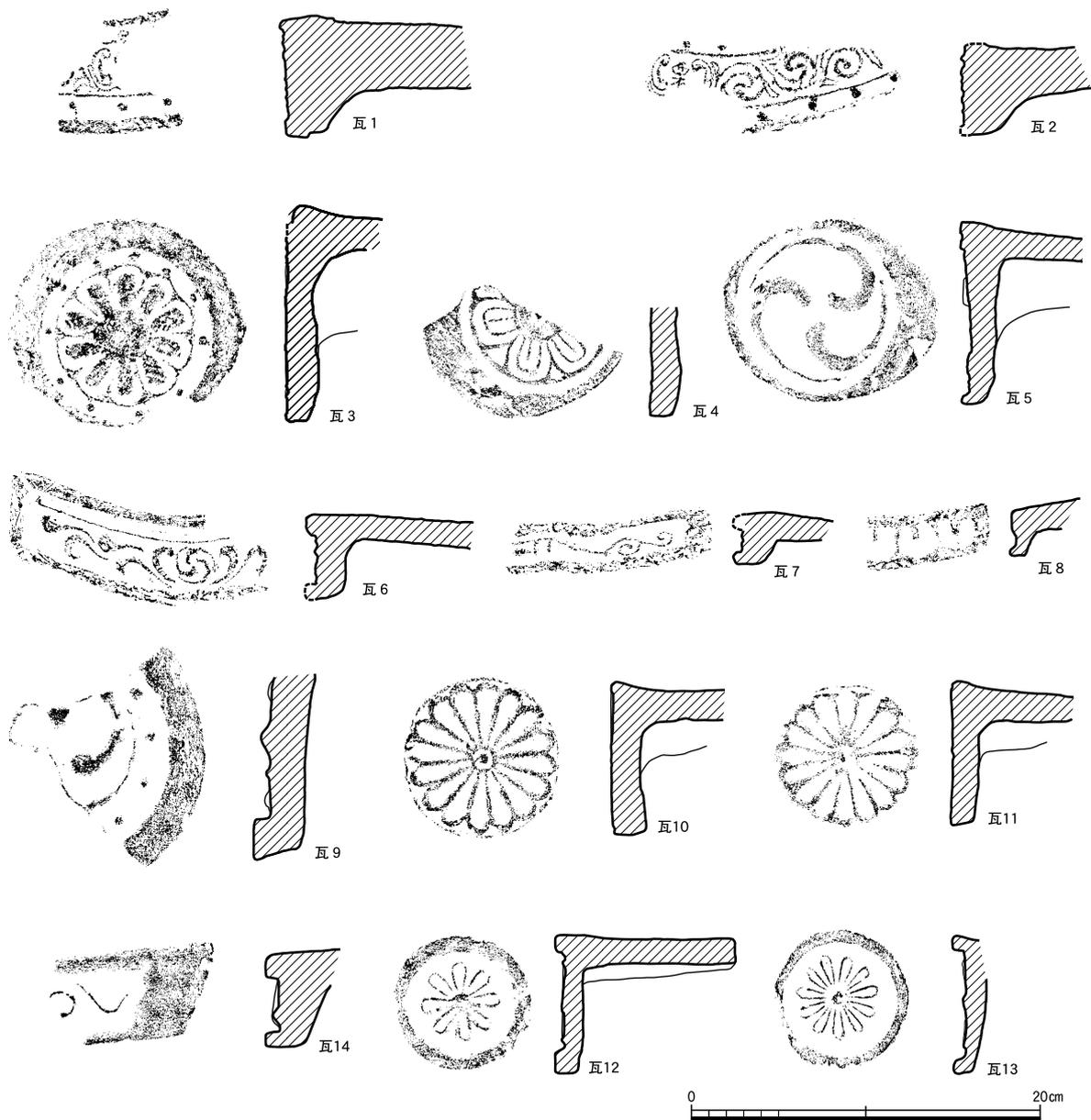


図 25 軒瓦拓影・実測図（1：4）

中心飾りは剣頭文を配する。胎土は軟質である。1区2層出土。瓦8は剣頭文軒丸瓦である。瓦当は半折り曲げで幅が狭い。胎土はやや軟質で5mm程の石が混じる。1区2層出土。

瓦9は巴文軒丸瓦である。巴は左巻きで太い。太い珠文を配する。胎土は粒砂が混じるが硬質である。1区3層出土。瓦10は菊文軒丸瓦である。16葉一重菊、無周縁でボタン状の中房。胎土はやや硬質で粒砂が混じる。1区2層出土。瓦11は菊文軒丸瓦である。16葉一重菊、無周縁で、中房は不明瞭。胎土は硬質で粒砂が混じる。1区2層出土。瓦12は菊文軒丸瓦である。8葉一重菊、有周縁で鋌状中房である。瓦当面にキラコ、胎土は硬質である。2区4層出土。瓦13は菊文軒丸瓦である。11葉一重菊、有周縁で鋌状中房である。瓦当面にキラコ、胎土はやや軟質である。1区2層出土。瓦14は唐草文軒平瓦である。胎土は軟質で粒砂が混じる。1区3層出土。

### (3) 金属製品 (図 26、図版 7)

金 1 は飾り金具である。6 葉形の釘隠で、銅製で鍍金が施されている。文様はなく、中央に四角い小さな穴がある。本殿の西側で出土したが、現本殿で使われているものより小さく、他の社殿で使用されたものと考えられる。長径 9.5 cm。2 区の 8 層出土。

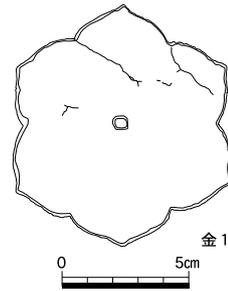


図 26 金具実測図 (1:3)

## 5. ま と め

今回の調査は、約 3 年間にわたり断続的に実施した。その検出遺構・出土遺物の成果を以下に記述してまとめとしたい。

2 区で検出した江戸時代の南北方向の柵の東には、本殿を「逆コ字」に囲う柵（玉垣）があり、検出した柵と平行し、北端のピットは現東西玉垣のほぼ延長上にあたる。京都御大工頭の中井家が寛永年間に作成した「下賀茂社堂舎絵図」本殿部分（図 28）を見ると、東西玉垣の長さが「拾四間」との記載があり、現玉垣は十二間で、記載より二間分短い。柵が現玉垣より一間分西に位置し、さらに江戸時代の遺物が出土していることなどを考え合わせると、この柵は絵図に記載された寛永六年（1629）に遷宮された本殿に伴う玉垣の西側柱列の跡と考えられる。

3 区で検出した石列を伴う遺構は、上述の絵図の大炊殿部分（図 29）には、大炊殿の北端から三井社の築地へ向かって東西方向に「練築地」が記載されており、検出遺構と位置が一致していることから記載の築地の基底部に該当すると考えられる。この築地は明治以降に移設されたと考えられる。

5 区の第 1 面で検出した花崗岩と南北方向に堅く締まった面は、明治初年の「賀茂御祖神社素絵図」（図 30）によれば、三井社西廊下の西と西鳥居の間に南北方向の門が描かれている。この門（西門）は平成の初め頃までこの場所にあったが、現在は西側に移されている。検出した堅く締まった面は、絵図に見られる門跡の整地面で石は塀の柱の据付け石と考えられる。溝 27 については、「鴨社古図」（図 33）記された三井社と齋院御所の境に位置しており、両者を分ける区画溝の可能性はある。

6 区の集石 19 は、形状や検出位置から奈良の小川周辺の調査（1～5 次）で検出された集石遺構と同じ性格とは考えにくく、建物関係の遺構と考えられる。

立会調査は、181 箇所まで遺構検出・断面観察を行った。その結果、古墳時代の落込み・包含層、平安時代の包含層・整地層、鎌倉時代から室町時代の包含層、江戸時代の礎石・石列・ピットなどを検出した。（図 27、表 3）。

古墳時代の遺構は、神服殿西側 No. 91 地点と棟門下 No. 139 地点の 2 箇所、No. 91 地点の包含層は No. 139 地点の落込みから続くものと考えられるが、No. 91 地点より南の No. 92 地点ではこの包含層は消滅している。

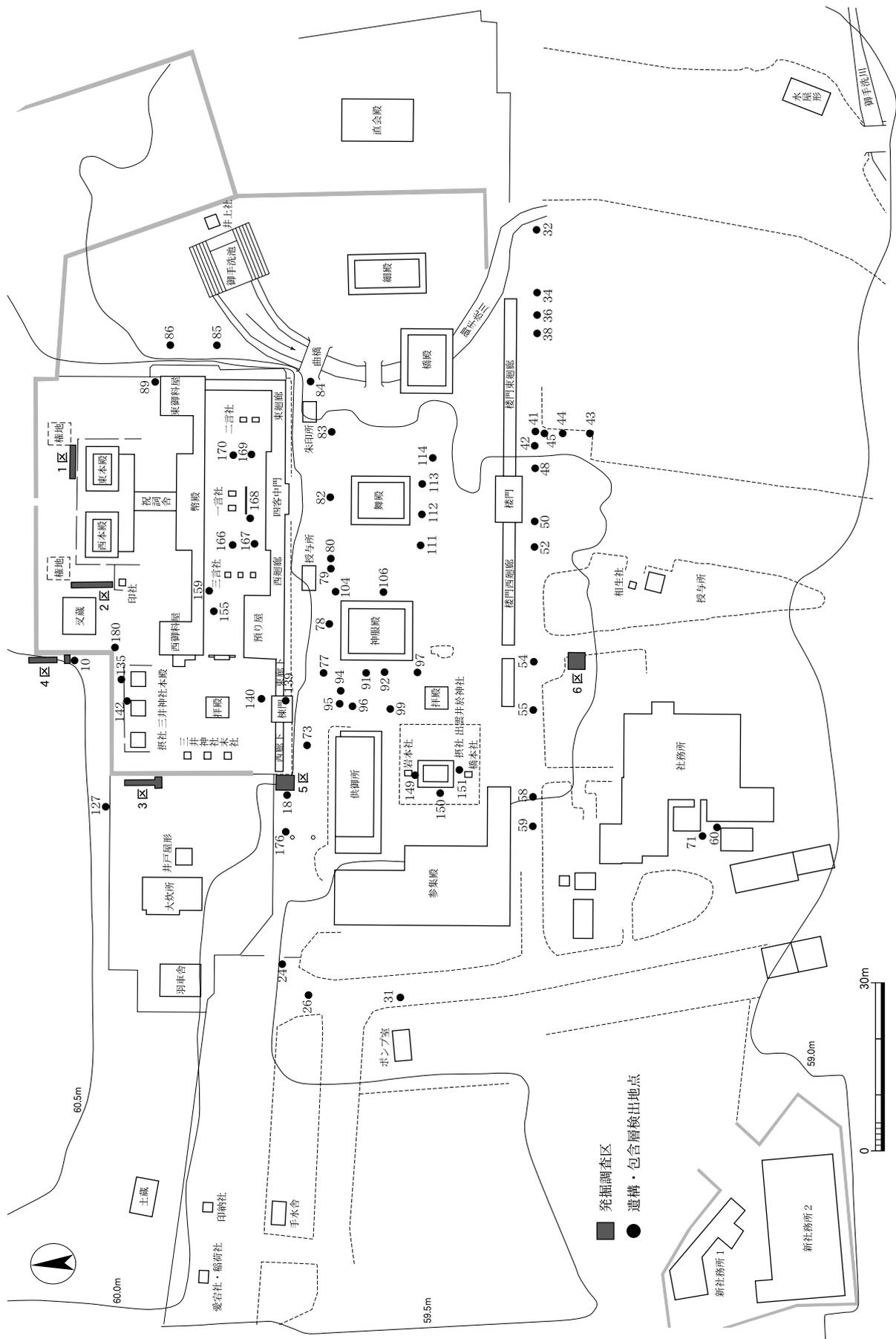


図 27 立会調査遺構検出地点位置図 (1 : 1,000)

表3 立会調査主要遺構検出地点一覧表

地点No.	位置	調査概要
10	本殿西築地西側	-0.1mで江戸時代の土坑検出
18	大炊所南東側	-0.1mまで現参道、-0.4mで旧参道整地層
24	参集殿北西側	-0.1mまで現参道、-0.3mで旧参道整地層
25	参集殿北西側	-0.5mで平安時代の瓦出土、以下1.0m砂礫層
26	参集殿北西側	-0.5mで路面検出
31	駐車場ポンプ室東側	-0.5mで時期不明の土坑検出
32	直会殿南西側	-0.15mで江戸時代以降の路面検出
34	楼門東廻廊南東側	-0.6mで平安時代～鎌倉時代の土器出土
38	楼門東廻廊南側	-0.4mで瓦と礫の整地面検出
41	楼門東廻廊南側	-0.4m以下粗砂と白砂の互層堆積を確認
42	楼門南東側	-0.2m以下粗砂と白砂の互層堆積で土師器片出土
43	楼門南東側	-0.2m以下粗砂と白砂の互層堆積で平安時代～鎌倉時代の白色土器が出土
44	楼門南東側	-0.3m以下粗砂と白砂の互層堆積で平安時代～鎌倉時代の白色土器が出土
45	楼門南東側	-0.2m以下粗砂と白砂の互層堆積で平安時代～鎌倉時代の白色土器が出土
48	楼門南東側	-0.4mで旧参道検出
50	楼門南西側	-0.1mまで現参道、-0.26mで整地面検出
52	楼門南西側	-0.3mまで現・旧参道、-0.8mで古墳時代の土器出土
54	楼門西廻廊南西側	-0.2～0.4mで時期不明の土師器出土
55	楼門西廻廊南西側	-0.5mで落込みの東方検出、西へ続く
58	参集殿南東側	-0.3～0.7mで平安時代の土師器・瓦出土
59	参集殿南東側	-0.2mで参道、-0.3～0.7mで鎌倉時代の土師器出土
60	社務所西側	-0.4mで鎌倉時代の整地層検出
71	社務所西側	-0.4mで鎌倉時代の土器出土
73	三井神社南側	-0.4mまで参道、-0.4mで時期不明のピット検出
77	神服殿北西側	-0.3mまで参道、-0.3mで南北にピット3基と平安時代の整地層検出
78	神服殿北側	-0.3mまで参道、-0.3mで東西にピット4基と平安時代の整地層検出
79	授与所南東側	-0.4mまで参道、-0.4～0.6mまで平安時代の包含層、-0.7mで時期不明ピット検出
80	授与所南東側	-0.4mまで参道、-0.4mで平安時代の整地層、-0.5mで時期不明の土坑・ピット検出
82	本殿中門南側	-0.4mまで参道、-0.4mで平安時代の整地層検出
83	朱印所南西側	-0.4mまで参道、-0.4mで平安時代の整地層、-0.7mで時期不明の落込みの西肩検出
84	御手洗川曲橋西側	-0.3mで北東方向の石列を検出
85	東御料屋南東側	-0.3mで平安時代の包含層、-0.7mで粗砂層の流れ堆積検出

地点No.	位置	調査概要
86	東御料屋東側	-0.58mで平安時代後期の包含層検出、表土層から二葉葵の文様に底部に「鴨社」銘京焼出土
89	東御料屋北側	現築地の石垣掘形から江戸時代前期の土器出土
91	神服殿西側	-0.3mで桃山時代～江戸時代前期の包含層、-0.6mで古墳時代の包含層検出
92	神服殿西側	-0.26mで桃山時代～江戸時代前期の包含層検出
94	神服殿北西側	-0.18mで室町時代の土師器が多量に混じる包含層検出
95	神服殿北西側	-0.18mで江戸時代のピット、-0.23mで室町時代の土師器が多量に混じる包含層検出
96	神服殿北西側	-0.18～0.4mで室町時代の土師器が多量に混じる包含層検出
97	神服殿南西側	-0.18mで江戸時代のピット2基検出
99	出雲井於神社北東側	-0.14mで室町時代以降の土坑検出
104	神服殿北東側	-0.28mで江戸時代の土坑検出
106	神服殿東側	-0.26mで江戸時代前期のピット2基検出
111	舞殿南西側	-0.17mで江戸時代のピット検出
112	舞殿南側	-0.14mで江戸時代のピット検出
113	舞殿南側	-0.21mで江戸時代のピット検出
114	舞殿南東側	-0.48mで江戸時代の礎石検出
127	大炊所北東側	-0.14mで布目痕の土師器出土
135	三井神社本殿北側	-0.15mで室町時代の土坑検出
139	三井神社棟門下	-0.3mで江戸時代前期以前の化粧砂、-0.37mで古墳時代の落込み南肩を検出
140	三井神社棟門北側	-0.32mで室町時代の整地層検出
142	三井神社本殿北側	-0.1mで室町時代の土坑検出
149	出雲井於神社内	-0.12mで室町時代の包含層検出
150	出雲井於神社内	-0.08mで室町時代の包含層検出
151	出雲井於神社内	-0.08mで室町時代の包含層検出
155	西御料屋南東側	-0.24mで江戸時代前期の化粧砂、下層で緑石を検出
159	三言社北西側	-0.34mで平安時代の包含層検出
166	三言社東側	-0.36mで平安時代の包含層検出
167	三言社東側	-0.3mで平安時代の包含層検出
168	一言社南西側	-0.38mで平安時代の包含層検出
169	一言社東側	-0.44mで平安時代の包含層検出
170	一言社北東側	-0.44mで平安時代の包含層検出
176	大炊所南東側	-0.38mで時期不明の土坑
180	又蔵南西側	-0.04mで鎌倉時代の土器出土

平安時代の遺構は、平安時代中期後半の遺物を含む包含層は一言社周囲で検出しており、断面からもこの包含層はさらに四方に広がっていると考えられる。包含層は厚さは0.15～0.30 mあり、一言社西側では落込み状に南に下がるが、これらは一連の整地と考えられる。さらに、堅く締まった整地層を神服殿周辺のNo. 77～80 地点でも検出している。また、本殿中門の南・神服殿の南西・舞殿の南東で検出したピットや土坑は、出土遺物がなく時期は明確ではないが、江戸時代・平安時代の整地層下で検出しており、江戸時代以前の絵図「鴨社古図」(図 33) に描かれている建物に関連する遺構の可能性もある。白色土器がまとまって出土したNo. 43～45 地点の包含層は、船島の調査(6次)で検出した整地層と検出地点も近く、堆積状況も類似している。

鎌倉時代から室町時代の遺構は、神服殿西側のNo. 94～96 地点の室町時代の土師器細片と焼土・炭を多量に含む層は文明の乱後の整地の可能性がある。しかし、出雲井於神社の敷地から出土した室町時代の包含層からは江戸時代の土器が出土しており、また、この地が周辺より0.35～0.4 m高く盛土してあることから客土であると考えられる。

江戸時代の遺構は、楼門と本殿中門の間の境内で多数検出した。

神服殿付近のNo. 77・78・93～95 地点で検出した礎石やピットは、享保十三年(1728)の「御祖社図」(図 31)では神服殿が東西建物(籠屋)として描かれ、また、文久三年(1863)の「孝明天皇行幸境内舗設図」(図 32)には供料所と神服殿との間に建物が描かれており、これの建物に関係した遺構の可能性もある。

御手洗川の曲橋西側のNo. 84 地点で検出した石列は、石の下端が地表下約1.3 mで、現御手洗川の川底とほぼ同じ高さである。埋土から平安時代の遺物が出土しているが、石を縦位に使っていることなどから寛永五年(1628)の造営以降の遺構と考えられる。神服殿西側のNo. 91・92・94～96 地点で検出したこれらの包含層から出土した遺物が寛永六年(1629)の社殿造営時期と一致し、この辺一帯が整地されたと考えられる。No. 32 地点で検出した路面は船島の6次調査で検出した道の延長に当たると考えられる。

出土遺物の様相としては、出土した遺物の中で最も古いものが1・5区、神服殿西側のNo. 91 地点と三井社中門のNo. 139 地点などから出土した古墳時代前期の遺物で数点ある。奈良時代から平安時代中期前半の土器が1区から出土しているが極めて少ない。平安時代中期後半は5区、No. 167 地点などから出土しているが量は少ない。瓦は、平安時代中期の瓦が一番古く、出土量が増えるのが平安時代中期後半からで、一言社周囲のNo. 168～170 地点でまとまって出土した。最も出土量が多いのは平安時代後期から鎌倉時代中頃で、楼門南東側のNo. 43～45 地点、参集殿南側のNo. 58・59 地点、東御料屋東側のNo. 85 地点などでまとまって出土している。これ以降、室町時代後の応仁の乱期まではまとまって出土していない。しかし、江戸時代前期からは中期・後期を通じて継続的に出土している。

出土遺物の内容としては、時期を問わず土師器皿がもっとも多い。その中で平安時代後期から鎌倉時代では、京内に比べて、白色土器の比率が高い。また、量的には少ないが、東方公家町で出土例のある京内ではあまり見られない、口径が20 cm以上で底が上がる特大の土師器皿が出土し

ている。これらの土器は、神饌用土器（図 34）として使われたと考えられ、調査地の特色を示している。そして、ほとんど見られないのが輸入磁器や瓦器類で、室町時代に青磁が数片出土しているのみで、瓦器の煮沸土器も見られない。唯一、江戸時代前期の土師器羽釜が1点出土しただけである。さらに特徴的なのが京域で出土する土師器皿 N の形態や技法を模倣して作られたものが主流を占め、土師器皿 Nr も布目痕を残すものがほとんどである。

今回は発掘・立会調査では面積が狭く、掘削深度に制約されるなど、断片的であったため、遺構の拡がりや規模など正確にとらえることができなかったが、主要社殿の周辺を含めた境内の土層の堆積状況を大まかにとらえることができた。また、検出遺構からは神社以前の様相や社殿や境内の変遷の一端を窺うことができたことも成果のひとつである。また、出土遺物からは平安時代から江戸時代に至るまで、下鴨神社には京域の土器と異なる土器作りの集団が介在している可能性が読み取れたことなどの成果があった。検出した遺構の性格を特定するために、さらに、絵図を含めた文献史料を詳細に検討する必要があると、出土遺物も詳細に見直す必要があると考えられる。

#### 参考文献

- 1 (財) 糺の森顕彰会「奈良の小川・瀬見の小川発掘調査の報告会」『会報』第 14 号 1990 年
- 2 『史跡賀茂御祖神社境内（糺の森）発掘調査報告』宗教法人賀茂御祖神社 1992 年
- 3 (財) 糺の森顕彰会「奈良の小川・瀬見の小川発掘調査の報告会 第 2 報」『会報』第 16 号 1992 年
- 4 津々池惣一・櫻井みどり『史跡賀茂御祖神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-12 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2003 年
- 5 櫻井みどり『史跡賀茂御祖神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-12 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2005 年
- 6 近藤奈央『史跡賀茂御祖神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-15 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006 年
- 7 平尾政幸『史跡賀茂御祖神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-19 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2008 年
- 8 小松武彦『史跡賀茂御祖神社境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-15 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009 年
- 9 『木村捷三郎収集瓦図録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996 年
- 10 (財) 糺の森顕彰会『鴨社古図展』1985 年
- 11 田中一廣「京・岩倉木野の土師器－いわゆる幡枝土器の分類－」『中世土器研究論集』中世土器研究会 2001 年
- 12 嵯峨井建「王権と神祇」『社寺行幸と天皇の儀礼空間』思文閣出版 2002 年
- 13 丸川義広・加納敬二『平安京左京北辺四坊－第 1 分冊（公家町形成前）－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 22 冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2004 年
- 14 東 洋一『平安京左京一条北辺四坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所調査概報 2002-8 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002 年

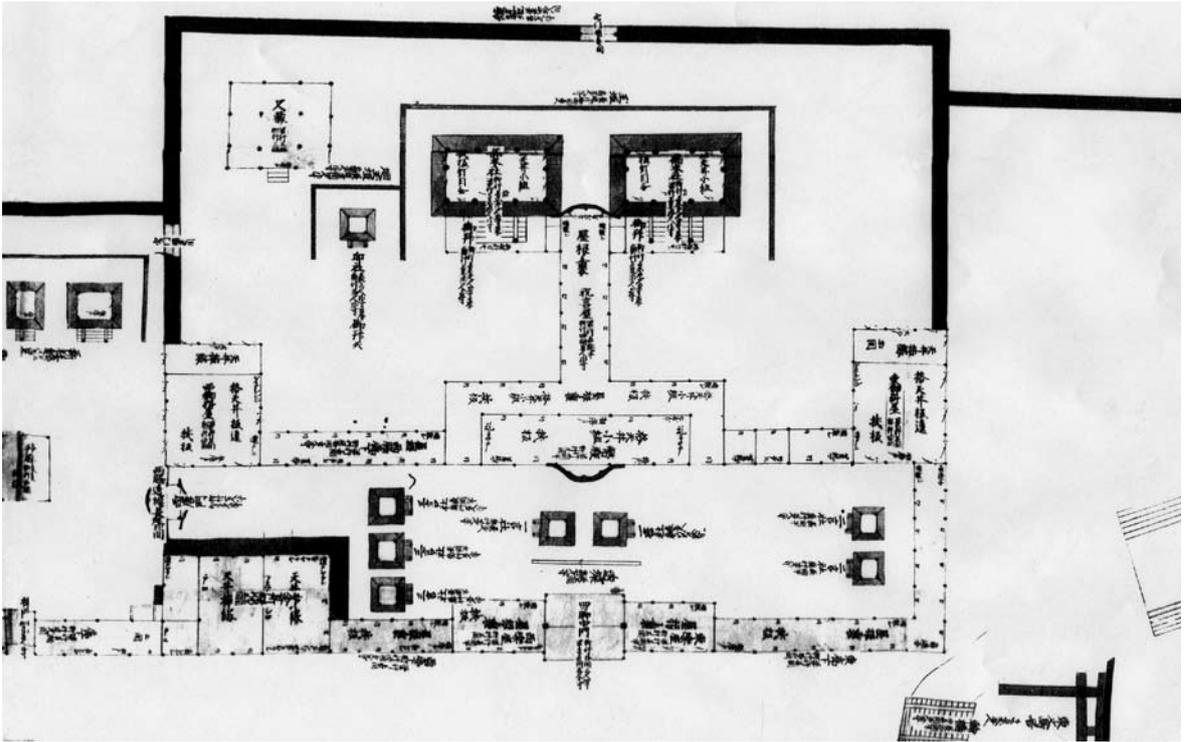


図 28 「下賀茂社堂舎絵図」本殿部分

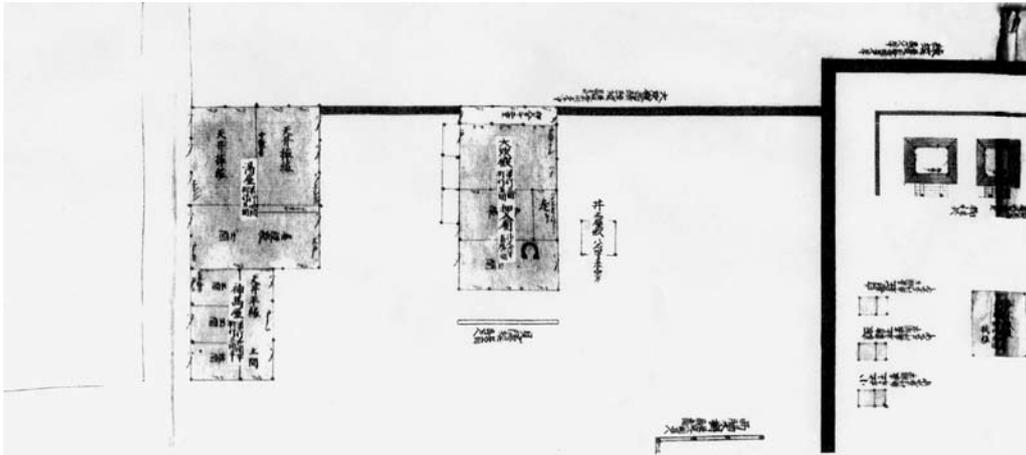


図 29 「下賀茂社堂舎絵図」大炊殿部分

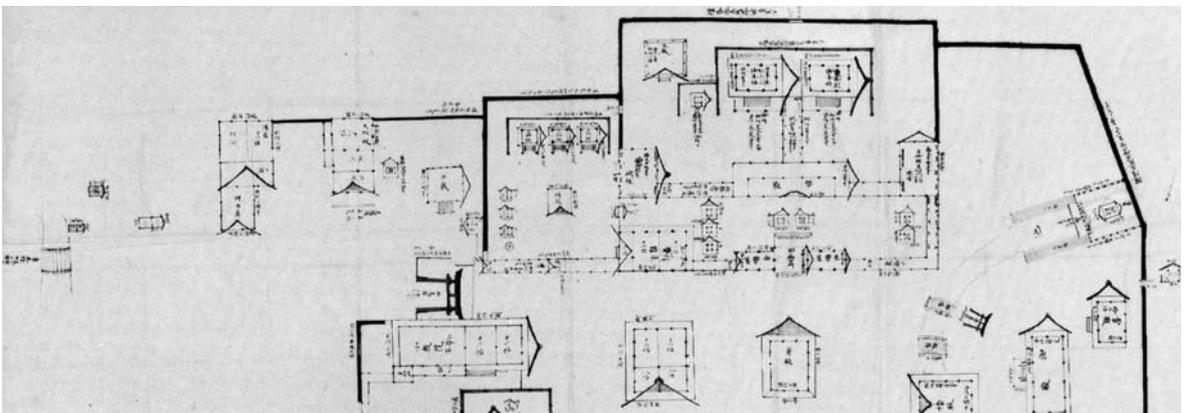


図 30 「賀茂御祖神社素絵図」

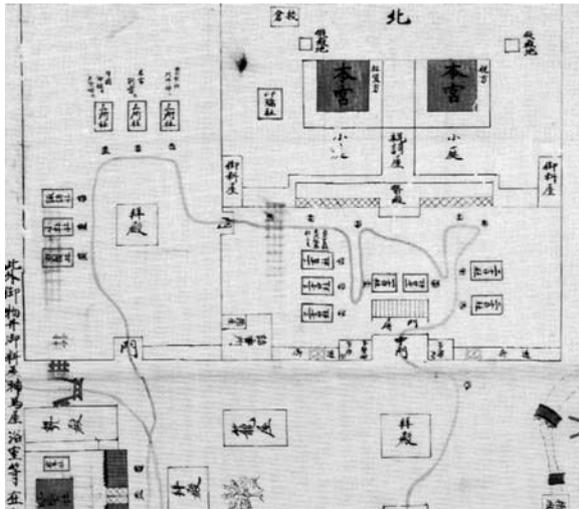


図 31 「御祖社図」享保十三年 (1728)

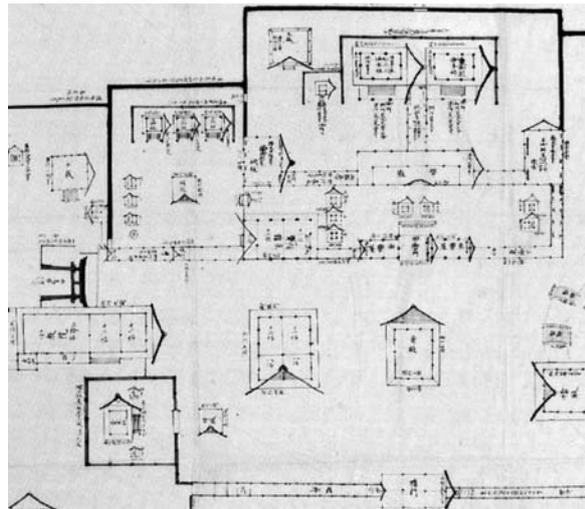


図 32 「孝明天皇行幸境内舗設図」文久三年 (1863)

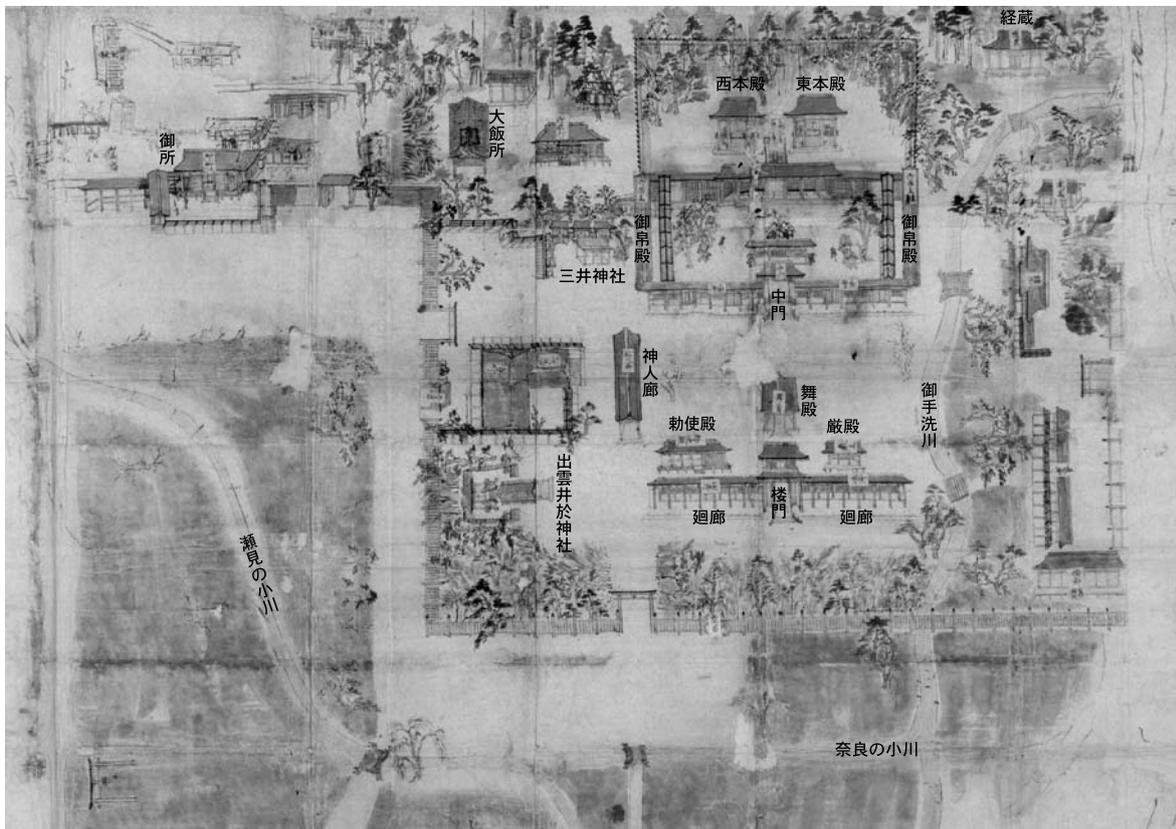


図 33 「鴨社古図」



図 34 「御蔭祭大宮河合社御蔭社献備神饌図」

# 版 图



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきかもみおやじんじゃけいだい							
書名	史跡賀茂御祖神社境内							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2010-14							
編著者名	小松武彦・田中利津子							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせきかもみおや 史跡賀茂御祖 じんじゃけいだい 神社境内	きょうとしききょうく 京都市左京区 しもがもいずみかわちょう 下鴨泉川町 ちない 地内	26100	A309	35度 02分 17秒	135度 46分 25秒	2008年12月 1日～2010 年6月30日	発掘調査 44.2m <sup>2</sup> 立会調査 延1,760m	防災施設 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡賀茂御祖 神社境内	史跡	古墳時代	落込み	土師器				
		平安時代	溝、集石遺構、整地層	土師器、白色土器、須恵器、瓦類				
		鎌倉時代 ～室町時代	包含層	土師器、輸入磁器				
		江戸時代	土坑、ピット、礎石、柵、築地、路面、石列、落込み	土師器、瓦類、金属製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-14

## 史跡賀茂御祖神社境内

発行日 2011年3月31日

編集  
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地  
〒604-0093 TEL 075-256-0961